

辻占都々逸研究

菊池真一

一 「辻占都々逸」とは何か

辻占については、青木元氏の御研究がある。(注一)本来は、辻に立つて通りがかりの人の言葉を聞き、それによつて吉凶等を判断する占いであるが、江戸時代後期には、小さな紙片に占い言葉を書いたものを「辻占」と称して売ったり、それを菓子類に入れて「辻占菓子」として売ったりすることが流行した。その占い言葉として都々逸を用いたり、占い言葉と都々逸とを併載したりしたものが「辻占都々逸」である。本稿では、辻占紙片に書かれたような短い占い文句を「辻占文句」と称することとする。

二 「辻占都々逸」各本の分類

今般、辻占都々逸本九十点五十三種を調査した。それを形態的に、次のように分類してみた。

まず、歌占系統のもの、おみくじ系統のもの、易占系統のもの、の三種に分類した。さらにそれぞれについて、辻占文句の有無、漢詩句の有無、算木図の有無等によつて細かく分類した。その結果は次の通りである。

A 歌占系統

- I 辻占文句のないもの
- II 辻占文句のあるもの
 - 1 番号のないもの
 - 2 番号を付すもの
- ① 詩入都々逸
- ② 単なる都々逸

B おみくじ系統

- I 項目見出しで吉凶を示すもの
 - 1 五言漢詩句を添えるもの
 - 2 五言漢詩句を添えないもの
- II 項目見出しで吉凶を示さないもの

C 易占系統

1 算木図のあるもの

1 辻占文句のないもの

2 辻占文句のあるもの

① 卦を漢字で示すもの

② 卦を平仮名で示すもの

II 白丸黒丸図のあるもの

1 辻占文句も判断文もないもの

2 辻占文句のあるもの

3 判断文のあるもの

これらについて、具体的にどの本がどの種に属するのかわ、次に示す。

A 歌占系統

I 辻占文句のないもの

『辻うらよしこの集』(大阪府立中之島図書館。228/186)

同じもの『辻うらよしこの集』(菊池真一蔵本)

II 辻占文句のあるもの

1 番号のないもの

① 詩入都々逸

『唐詩入げいしや都々逸』(玉川大学図書館。E788.5/ト)

② 単なる都々逸

『は唄恋の辻うら』(上田市立図書館花月文庫。音楽384)

(序題は『??? 辻占遊餅初編』か?)

『つちうら相撲ちん句』(筑波大学図書館。911.668c25-35)

2 番号を付すもの(いずれも吾妻雄兔子作)

① 詩入都々逸

『たゝみさん辻うら詩入都々逸』(蓬左文庫。尾-9-191)

同じもの『たみさんつじうら詩いりどゝ逸』(玉川

大学図書館。E788.5/タ)

『たゝみさん辻うら詩入都々逸』(都立中央図

書館東京誌料。564/71)

『登さん辻うら詩入どゝいつ 二編』(関西大学図書館。

911.65/k7/28)

同じもの『登さん辻うら詩入どゝいつ』(東北大学図

書館狩野文庫。5-17210-1)

『登さん辻うら詩入どゝいつ』(都立中央図

館東京誌料。564/106)

『たゝみさん辻占詩入都々いつ』(三編。菊池真一蔵本)

『つち占どゝ逸』(都立中央図書館東京誌料。564/47)

同じもの『たゝみさん辻うら詩入都々逸』(玉川大学

図書館。E788.5/シ)

② 単なる都々逸

『たゝみさん辻うら都々いつ』(筑波大学図書館。

911.668c25-46)

B おみくじ系統

1 項目見出しで吉凶を示すもの

1 五言漢詩句を添えるもの

『ムナシいき辻つら部々い』(東洋大学図書館。768.59/
Y89/17)

同じもの『ムナシいき辻つら部々い』(国立劇場。

H8-4/54)

『(新撰吉区)辻占部々逸稽古本 上の巻』(東洋大学図書
館。768.59/Y89/71)

『(新撰吉区)辻占部々逸稽古本 下の巻』(菊池真一蔵)

『辻占部々逸御隨箱』(外題は『けいじやマンい』)関西大
学図書館。和装/911.655/T1/1)

『ムナシ』(弘前市立図書館岩見文庫。#911.9/7)

2 五言漢詩句を添えないもの

『百籤抄(みく)部々い』(三康図書館。5/2609)

『ムナシの辻占図会 上之巻』(東洋大学図書館。768.59/
Y89/162)

3 項目見出しで吉区を示さないもの

『大しんはん流行たゝみさんよし』(菊池真一蔵)

C 易占系統

1 算木図のあるもの

1 辻占文句のないもの(判断文あり)

『辻占部々い』(東北大学図書館狩野文庫。5/17215/1)

同じもの『辻つら部々い』(都立中央図書館東京誌料。
5644/130)

『辻つら部々逸』(都立中央図書館東京誌料。5644/69)

同じもの『辻つら部々一図会』(『いろはかなかむり
逸』と合本。国学院高藤田小林。161/1-231)

『辻つら部々一図会』(『いろはかなかむり

ムナシ』と合本。上田市立図花月文
庫。音楽386)

『辻つら浮世とく逸』(青木元氏蔵)

『新文句部々一恋の辻占』(青木元氏蔵)

『部々いつもんくー入りうらなひ』(外題は『どくいつふ
ひとりうらなひ』。都立中央図書館東京誌料。5644-3)

同じもの『部々いつもんくー入りうらなひ』(外題は

『ムナシつげ恋の辻占』。都立中央
図書館東京誌料。5644-4)

『部々いつもんくー入りうらなひ』(外題は

『ムナシつげ恋の辻占』。都立中央
図書館東京誌料。5644-4ア)

『(辻占端唄)ムナシ大よせ』(菊池真一蔵。2本あり)

『辻占部々逸 乾の巻』(都立中央図書館東京誌料。5644/
65)

同じもの『辻占部々逸 乾の巻』(東洋大学図書館。

768.59/Y89/23)

『辻占部々逸 乾の巻』(菊池真一蔵)

『辻占部々逸 坤の巻』(都立中央図書館東京誌料。5644/
65)

同じもの『辻占部々逸 坤の巻』(東洋大学図書館。

768.59/Y89/51)

『辻つらムナシ』(東北大学図書館狩野文庫。5/17214/1)

『いろは開化新作ムナシ 上』(新城情報牧野。622/192)
『(開化)辻占部々い』(国全図書館。特44/179)

『じつじつら都々逸』(国会図書館。特43/263)

『じつじつら都々逸』(国会図書館。特44/153)

『絵入都々逸辻占八卦』(活版印刷。国会図書館。特50/678)

『たゞみさんつじ占時入都々逸』(国会図書館。特44/180)

『新版辻占ど々逸』(関西大学。和装/911.655/01/1)

『(端頭都々一)八卦辻占大全』(国会図書館。特43/167)

『同じもの『うた占』(都立中央図書館東京誌料。5643/37)

2 辻占文句のあるもの

① 卦を漢字で示すもの

『辻占ど々逸』(都立中央図書館東京誌料。5644/34)

『同じもの『辻占ら都々逸』(関西大学図書館。911.65/

K7/21)

『辻占ら都々逸』(東洋大学図書館。768.59/

Y89/42)

『辻占ら都々逸』(弘前市立図書館岩見文庫。W911.9/13)

『十二月月づくしつじ占とらとら』(筑波大学図書館。911.66M25-39)

『同じもの『十二月月づくしつじ占とらとら』(東洋

大学図書館。768.59/789/40)

『三十六歌仙占方ど々逸』(遼左文庫。尾19/187)

『辻占ど々逸』(上田市立図書館。花月音楽380)

② 卦を平仮名で示すもの

『辻占ら浮世と々逸』(関西大学図書館。911.65/K7/37)

『同じもの『辻占ら浮世と々逸』(弘前市立図書館岩見

文庫。W911.9/11)

『辻占ら浮世と々逸』(東北大学図書館狩野文庫。5/

17213/1)

『同じもの『辻占ら浮世と々逸』(玉川大学図書館。W768.5/7)

『辻占ら浮世と々逸』(関西大学図書館。和

装/911.655/16/1-4)

『辻占ら浮世と々逸』(東洋大学図書館。768.59/789/66)

『同じもの『つじ占浮世と々逸』(弘前市立図書館岩

見文庫。W911.9/12)

II 白丸黒丸図のあるもの

1 辻占文句も判断文もないもの

『(新文句)辻占度独逸』(中之島図書館。228/172)

『同じもの『(新文句)辻占度独逸』(大阪大学図書館小

野文庫。918.5/0N0/118)

『辻占ら浮世と々逸』(関西大学図書館。H911.91/

U3/1)

『(新文句)辻占度独逸』(都立中央図書館東

京誌料。5644/12)

『(新文句)辻占度独逸』(都立中央図書館東

京誌料。5644/116)

『辻占ら浮世と々逸』(上田市立図書館花月文庫。音

音楽351)

『辻占度独逸』(上田市立図書館花月文庫。音

楽387)

『新文句辻占らと々逸』(関西大学図書館。911.65/K8/

54)

『哇部類二編』(「しちぢうらの部」大阪府立中之島図書館。

228/172)

『心意氣辻占都々々』(菊池真一蔵)

2 辻占文句のあるもの

『心ざき辻うららぢうらつ』(菊池真一蔵)

3 判断文のあるもの

『恋の辻占独り判断』(関西大学図書館。911.65/K7/31)

同じもの『恋の辻占独り判断』(都立中央図書館東京

誌料。5644/120)

『恋の辻占独り判断』(国文学研究資料館。二

本。八1/40。八1/42)

『恋の辻占独り判断』(菊池真一蔵)

『都々々一独うららなひ』(都立中央図書館東京誌料。5644/59)

『錢占意気なよし此』(大阪府立中之島図書館。228/102)

同じもの『錢占意気なよし此』(東洋大学図書館。

768.59/Y89/60)

『錢占意気なよし此』(蓬左文庫。尾19-179)

『錢判断八卦好此』(筑波大学図書館。911.66/No25-22)

同じもの『錢判断八卦好此』(国会図書館。特43/280)

『錢判断八卦好此』(菊池真一)

『辻うら都々々い』(東洋大学図書館。768.59/Y89/24)

同じもの『辻うら都々々い』(東洋大学図書館。

768.59/Y89/78)

『たゝみざん辻うら都々々い』(国文学研究資料館。ナ1/

17)

三 「辻占都々逸」諸本の詳細

それぞれの系統について若干詳しく見てみる。

「A歌占系統」は、辻占都々逸の原初形態と目されるものである。都々逸を並べるだけ、もしくは番号を付するだけ、せいせい辻占文句を添えるだけで、他の占的要素(おみくじ・易占等)は見られない。

A「1辻占文句のないもの」は、最も素朴な形式で、都々逸に番号を付しただけのものである。辻うららぢの集』(大阪府立中之島図書館。菊池真一)のみがこれに該当する。半丁に五首が原則で、見開きに1から十までの番号を打っている。占いは二よりのはしに1より十まで印をつけ其内巻本を引、本をひらきたとえは1とでるときは1、又は六とあれば六に引合見るべし」とある。序記は嘉永六年で、成立年代が明確なもののうち、最も古いものである。

A「2辻占文句のあるもの」には、「1番号のないもの」と「2番号を付すもの」とがある。

「辻占文句」とは、例えば「○かんせいだねへ」や「○うかへししてらうね」などのように、都々逸に呼応した短い文句で茶々を入れるものが一般的であるが、都々逸に呼応しないもの、真面目に占いや葉を述べるものなどもある。『唐詩入けいしや都々逸』(玉川大学図書館)の序文の末尾には、「○まへの小がきは手あたりしだいのちよいとつぢうら」と注記がある。これが「辻占文句」の説明である。

A「1番号のないもの」には、『唐詩入げいしや都々逸』(玉川大學図書館)『は唄恋の辻うら』(上田市立図書館花月文庫)『つちうら相換ちん句』(筑波大学図書館)の三点がある。一番目は唐詩入都々逸であり、後二者は単なる都々逸である。

『唐詩入げいしや都々逸』(玉川大学図書館)のタイトルは中味と即応していない。『唐詩入辻占都々逸』ともあるべきものである。『は唄恋の辻うら』(上田市立図書館花月文庫)の序題は「?」辻占餅初編序」(二文字分不明)となつてゐるが、その序文は次のようなものである。

前に南駅の田舎翁が、手製の風味いちじるき、大黒煎餅の点心(おちやうけ)は、普く通家の口に叶ふて、老舗の株に数椀を重下戸も上戸も氣請よく、売(うれ)るといふを的当(きつ)かけ(に)畑は同辻占餅、待人かけし君達はじめ、めせや辻占つちうらや辻占

ここには、新吉原の辻占煎餅売りの図が掲げられているが、この序文から辻占煎餅は南駅即ち品川遊廓で売りはじめられた大黒煎餅にヒントを得たものであることが知られる。「数椀を重」というのは、実際の大黒煎餅から転じて、『音曲大黒煎餅』という本が六巻を重ねたことを指していると考えたい。この本は、辻占煎餅が大黒煎餅を模倣したのにとよせて、『音曲大黒煎餅』にならつて『辻占煎餅』という本を出しますよ、と宣言しているのであろう。

『つちうら相換ちん句』(筑波大学図書館)の序文の前半は次のようなものである。

相換じん句と都々一とは同物なり、然れどもじん句の方は破運を旨とす、依りてじん句都々一兼帯の、間の文句を撰み、どちらも外さぬ辻占さへ句中に加ふ。

この本の序文の後には、占い方が記載されている。

このつちうらの見やうは心に思ふねがひ(このそのよしあしを告る人と右左をさだめ置目をとち手にあたるころをひらき右とさだめたらば右にあるうたと小書左とさだめたらば左にあるうたち小書にてそのよしあしを知る也

この占い方はA「1番号のないもの」に共通するものである。

A「2番号を付すもの」は、全て吾妻雄鬼子の作である。

『①詩入都々逸』は次の三種がある。『たゝみさん辻うら詩入都々逸』(逸左文庫。玉川大学図書館。都立中央図書館東京誌料)『畳さん辻うら詩入とゝいつ二編』(関西大学図書館。東北大学図書館狩野文庫。都立中央図書館東京誌料)『つち占とゝ逸』(都立中央図書館東京誌料。たゝみさん辻うら詩入都々逸。玉川大学図書館)である。

『②単なる都々逸』は『たゝみさん辻うら都々いつ』(筑波大学図書館)のみである。

これらは同じ作者であるから、同じような占い方が記されている。一例を挙げる。『たゝみさん辻うら詩入都々逸』に記載された「〇たゝみさんつちうらの見やう」は次のようなものである。

このうらないの見やうはたゝみの上へかんざしにてもなにゝてもなげいだしそのなげたるものゝさきのかたのあたりたるすぢよりひとすぢ二たすぢとかぞへ十にてとまれば第十又廿にてとまれば第二十のどゝ一とわきの小がきのもんくをもつてそのよしあしをうらないしるべきものなり

他本も序文の内容は異なつても、この占い方についてはほとんど同じである。この「小がき」といふのは辻占文句を指している。

「B おみくじ系統」は、都々逸におみくじの要素を付加したものである。ほとんどのものが「1項目見出して吉凶を示すもの」であるが、おみくじ的な書き方をしながら、吉凶を示さない「大しんはん流行たゝみさんよしこの」(菊池真一蔵)のようなものもある。B「1項目見出して吉凶を示すもの」には、「1五言漢詩句を添えるもの」と「2五言漢詩句を添えないもの」とがあり、「1五言漢詩句を添えるもの」には、次の五種がある。

『ごろいき辻うら都々いつ』(東洋大学図書館。国立劇場)

『新撰吉凶』辻占都々逸稽古本 上の巻』(東洋大学図書館)

『新撰吉凶』辻占都々逸稽古本 下の巻』(菊池真一蔵)

『辻占都々逸御蘭箱』(関西大学図書館)

『ごろいき辻うら都々いつ』(弘前市立図書館岩見文庫)

この五言漢詩句は、元三大師御飯本に掲載された五言四句の漢詩の中の一句を採ったもので、諸本共通している。五言漢詩句を添えるのみで、判断文等一切の説明を載せていないのが特徴である。

『ごろいき辻うら都々いつ』(東洋大学図書館。国立劇場)の序文は次のようなものである。

何事によらず思ふ事有もの易によつて善悪を占ひ御蘭を取て吉凶を定むるは世の常の事になんされど仮初の事などには問ふべき事にはあらざるべし只其品と時により思ふ先の心いき首尾の吉凶待人には昔は歌占今は辻占煎餅最中始は合うといふなる義に叶へど不来婦(こんぶ)といふは禁句ゆへ是は気をえへどちふみの本まこと嘘の虚々実々御蘭によそへて歌占と辻うらかた

をかたどりしを又唄占と翻訳して其よしあしをつけの御あらひ髪のさらりとわかる都々いつによる文句の判断其身／＼のぞみにとりいづれよしなに御すいもじと花をしたふ爲のうた中間なる 多川路暁がいふ

これによると、辻占煎餅の外に、辻占最中、辻占始、辻占昆布のあったことが知られる。

「2五言漢詩句を添えないもの」は次の二種である。

『百籤抄(みくじ) 都々一』(三康図書館)

『よしこの辻占図会 上之巻』(東洋大学図書館)

後者は都々逸の外には、番号と吉凶を記すのみであるが、前者には詳しい判断文・解説文が載っている。後者は極小本であるが、見返しには辻占煎餅の図を掲げ、一丁ウ・二丁オの見開きには「歌占図」を掲げている。それは、神主らしき人が八枚の短冊の下がつた弓を持つているものである。辻占都々逸の起源が歌占と信じられていたことが分かる。

辻占都々逸本には、「C易占系統」のものが最も多い。

その中でも最も多いのが、「1算木図のあるもの」で、六十四卦を記し、判断文を掲げるものが殆どである。「1辻占文句のないもの」がそれである。次の十七種を数える。

『辻占都々一』(東北大学図書館狩野文庫。都立中央図書館 東京誌料)

『辻うら都々逸』(都立中央図書館東京誌料。国学院高藤田 小林。上田市立図花月文庫)

『辻うら浮世と逸』(青木元氏)

『新文句都々一恋の辻占』(青木元氏)

『都々いつもんく一人りうらなひ』(都立中央図書館東京誌料三本)

『辻占端唄』とゞ一大よせ』(菊池真一二本。)

『辻占都々逸 乾の巻』(都立中央図書館東京誌料。東洋大
学図書館。菊池真一)

『辻占都々逸 坤の巻』(都立中央図書館東京誌料。東洋大
学図書館)

『辻うらんど』(東北大学図書館狩野文庫)

『うらない開化新作ど』(上)『新城情報野』

『開化』辻巫都々』(国会図書館)

『つじうら都々逸』(国会図書館)

『つじうら都々逸』(国会図書館)

『絵入都々逸辻占八卦』(国会図書館)

『たゞみさんつじ占詩入都々逸』(国会図書館)

『新板辻占ど』(関西大学)

『端唄都々』(八卦辻占大全) (国会図書館。都立中央
図書館東京誌料)

この中で、『都々いつもんく一人りうらなひ』の序文には、次のよ
うにある。

六の銭を投て善悪を見るに男女の途中を悟り待人の時をうらな
ひ願望を唱歌になしては誰もあざけり玉ふなれど仕様は野賤に
はありふれた新井白蛾が六十四卦判の言葉をそのまゝに心つく
し海のはて狼すさむ山野はしらす先流行のとゞく地には都々逸
しらぬ人もなし又うらなひも同じことト仕やうをくわしく記さ
ぬ也

これによれば、新井白蛾の書物を参考にしたらしい。『易学小筓』と

比較してみると、一番最初の「乾为天」の項目については、『易学
小筓』と『都々いつもんく一人りうらなひ』の記述はかなり一致す
るが、その他の項目については、かなり相違点が目立つ。ある程度
参考にはしたものの、すべて『易学小筓』に則っているという訳で
はなさそうである。

C「算木図のあるもの」の中には、算木図・六十四卦を掲げな
がらも、判断文を記さず、辻占文句を示すに止まっているものがある。
『2 辻占文句のあるもの』がそれである。卦を漢字で示すもの
と平仮名で示すものがあるが、形式的には全く同じである。

①卦を漢字で示すもの」には、次の五種がある。

『辻うら都々逸』(都立中央図書館東京誌料。関西大学図書
館。東洋大学図書館)

『辻うら都々いつ』(弘前市立図書館岩見文庫。『911.9/3』)

『十二月づくしつじうらんど』(筑波大学図書館。東
洋大学図書館)

『三十六歌仙占方ど』(蓬左文庫)

『辻占ど』(上田市立図書館)

②卦を平仮名で示すもの」には、次の三種がある。

『辻うら浮世と』(関西大学図書館。弘前市立図書館岩
見文庫)

『辻占うきよと』(東北大学図書館狩野文庫。玉川大
学図書館。関西大学図書館)

『辻うら浮世と』(東洋大学図書館。弘前市立図書館
岩見文庫)

「C易占系統」の中でも、算木図の代りに白丸黒丸又は銭形図を記すものも多い。「II白丸黒丸図のあるもの」は三種類に分けられる。

「I辻占文句も判断文もないもの」には、次の四種がある。

『(新文句)辻占度独逸』(中之島図書館。大阪大学図書館

小野文庫。関西大学図書館。都立中央図書館東京誌料二

本。上田市立図書館花月文庫二本)

『新文句辻つらと、一ツ』(関西大学図書館)

『哇部類二編』(大阪府立中之島図書館)

『心意気辻占都々』(菊池真一)

この中で、『(新文句)辻占度独逸』の序文の最後には、

安政二巳年の菊月

郷銭占(せにうら)度独逸新案の元祖

金籠山人谷寂我誌

とある。これを信すれば、六枚の銭を投げる占い方は、梅畚里谷寂の発案だということになる。

この本の序文の次に記された「凡例」に占い方の詳細が記述されている。

此占の見やうは「思ふことひとつかなへば又ニツ三ツ四ツいつも六ツのうらなひ」このうたを三べんとなへ四文銭を六ツ両手に入れてよくふりたてつゝ何事によらず思ふことを心に念じて件の銭を投ならへ見るべし形を白とし波を黒とし本文の陰陽にひき合せて文句の善悪によりおもふことの善悪を知るなり善き唄に当らば何こともいそぎてよし成就するなり悪き哇ならば何こともひかへめにするがよし多くは望みごと協はず待人来らず仮令ば男女とも色に成たいと思ふ時善き文句ならば平ツたくう

ちつけにいひ寄べし悪き文句ならば媒を●(テヘン+「屯」)たの(むとも詮なしその他これに准ず亦六十四卦の変易あり●(そ)は後編に著すきて鳥目をむさくるしとおぼす方は碁の陽石を六つ方面黒漆にて塗らせ用ぬ給ふべし

C「II白丸黒丸図のあるもの」で「2辻占文句のあるもの」は、次の一種のみである。

『心いき辻つらと、一ツ』(菊池真一蔵)

C「II白丸黒丸図のあるもの」で「3判断文のあるもの」は、次の六種である。

『恋の辻占独り判断』(関西大学図書館。都立中央図書館東京誌料。国文学研究資料館二種。菊池真一)

『都々一独うらなひ』(都立中央図書館東京誌料)

『銭占意気なよし此』(大阪府立中之島図書館。東洋大学図書館。蓬左文庫)

『銭判断八卦好此』(筑波大学図書館。国会図書館。菊池真一)

『辻つら都々いつ』(東洋大学図書館二種)

『たゝみざん辻つら都々いつ』(国文学研究資料館)

四 占い方の様々

占い方を指示しているものがある。その記述を整理すると、次の

ようになる。

イ. 本を開いて、出た所を見る。

〈A II 1 ②〉『つぢうら相換ちん句』〈

〈B I 1 1〉『ころいき辻うら都々いつ』(『新撰吉凶』辻占都々逸 稍古本) 『辻占都々逸御隠箱』〈

ロ. こより法(一から十の番号をつけた紙縵を用意し、それを引く)。

〈A I 1 1〉『辻うらよし』この集』〈

ハ. 盤算(簪等を盤の上に投げ、目の数を数える)。

〈A II 2 ①〉『たゝみさん辻うら詩入都々逸』『つぢ占どゝ逸』『盤さん辻うら詩入どゝいつ』〈

二. 目をつぶって、かんざし又は小楊枝を目次の算木図の上に落とす。

〈C I 1 1 1〉『辻うら浮世とゝ逸』(『開化』辻巫部々々)』〈

〈C I 2 ①〉『辻うら都々逸』(『十二月づくしつぢうらどゝいつ』) 『三十六歌仙古方どゝ逸』〈

〈C I 2 ②〉『辻うら浮世とゝ逸』『辻占うきよとゝいつ』『辻うら浮世とゝいつ』〈

ホ. 算木又は錢六枚で卦を出す。

〈C I 1 1 1〉『端唄部々々』(八卦辻占大全)』〈

ハ. 六枚の錢を投げ、表裏を見る。

〈C I 1 1 1〉『新板辻占どゝ逸』『辻うら都々逸』『絵入都々逸辻占八卦』『新板辻占どゝ逸』〈

〈C II 1 1 1〉『新文句』(辻占度独逸)』『心意氣辻占部々々』『新文句辻うらよし』(『集』)』〈

〈C II 2 1 1〉『心いき辻うらどゝいつ』(『集』)』〈

〈C II 3 1 1〉『恋の辻占独り判断』(『集』)』〈

ト. 三本の算木を二度に分けて投げる。

〈C I 1 1 1〉『辻うらどゝいつ』(『集』)』〈

五 菊池所蔵本十種

句辻うらとゝいつ』〈

〈C II 2 1 1〉『心いき辻うらどゝいつ』(『集』)』〈

〈C II 3 1 1〉『恋の辻占独り判断』(『集』)』〈

ト. 三本の算木を二度に分けて投げる。

〈C I 1 1 1〉『辻うらどゝいつ』(『集』)』〈

五 菊池所蔵本十種

菊池所蔵の辻占都々逸本は、十一・十種になる。これらは、先の大項目ABCは勿論のこと、中項目A!・A II・B I・B II・C I・C IIの全てに及ぶ。従って、菊池所蔵本を見ることにより、辻占都々逸本の全貌のおおよそが把握できる。以下、菊池所蔵本の全てをまとめて翻刻紹介することとする。

A 歌占系統

一 辻占文句のないもの

『辻うらよし』此集(『菊池真一蔵本、嘉永六年。川辺屋音次郎・石川屋治兵衛版)』

辻うら佳子の集(表紙)

辻うら占ひやうの伝

辻うら占なはんと思ふとき先氣をしづめ心にうたがひをおこさずしてとるべし引やうは、如此こよりのはしに一より十まで印をつけ其内容本を引本をひらきたとへば一とでるときは一又は六とあれば

六に引合見るべし(見返し)

序

それ歌占は二神天の巷にさよの手枕はじめにて其古事はしらまゆみゆひ尽されぬ旨の葉も逢ふ恋まつこひ忍恋こひもうすひもあるならひふかき色には藪命(そめいろ)路のやま／＼積る千早振紙をひねりて取置も逢ふて嬉しのみすかゝみちらして見たき(序才)

貞操(わがこゝろ)まよひをとらねばこれもよし此道ばかり心底にかげまく神を力くさやがて謹上幸ひともめ給ふことなればとふかみ笑み玉へとしか云ふ

嘉永六林鐘 朝辛酒宮 鍋酒誌(序ウ)

一 桜々と浮れて居れどつらや勤に夜をふかす

二 咲て居れども浮気な花かとかく香の散庭の梅

三 風に狂(くるひ)の柳は本にとけつもつれつ気がもめる

四 たれに人目がある桜ばな笑顔かくせし朝がすみ

五 いなせが散行桜は本にとんだ心の置どころ(老オ)

一 人目兼たるへだての垣をつなぎ止たるふちの花

二 散は元より兼ての承知仇に咲した花じやもの

三 一夜情にやどりし蝶もともにぬれたる花のつゆ

四 本にいろ／＼世けんのはさそしり咲するおそざくら

五 なんぼ日かげの花じやといふてそれさ胡てうにすいがな(老ウ)

六 散のちらんのみな口々に情しらずがいふさくら

七 私しばかりか小蝶でさへもうつす心の深み草

八 よひに曇りし空とは本に雨にやつれの朝さくら

九 今宵しゆびして忍で居れど晴て合れぬおほろ月(二才)

一 いつか此身もはや秋風とぬしをかへして跡でふく

二 長き糸にしと思ひの中も切てほいなひ風の糸

三 糸見切れてかうなるからはやぶれかぶれのかゝり風

四 いつか身よりする身はほんに空に心の昇り風

五 宵のくもりに笑顔の梅もふけてしん苦のつもる雪(二ウ)

六 ほんに思はにや夢にも見まい覚てしんきな事ばかり

七 逢ふた思の咄しにつけて聞もしんきな明のかね

八 まてど便のない此ころをにくや空引鐘の声

九 心しらずか此ふける夜を月に浮るゝやぼがらす

十 なぜか添はれぬ此身はほんに結び違ひかえんの神(三才)

一 りん気しながら書たるふみも筆に根をもつ恨事

二 水の行末と此身はほんにいつかはてしがないわいなア

三 思ひこんだる此身のそらを聞けばぬしあるあなたをば

四 嬉しもつれもとけそゝくれて千話も苦せつこの種となる(三ウ)

六 つもる思ひにはてしがなふていつかとけないふじの雪

七 はれて添はれぬ恋の間に昇りつめたる身の苦勞

八 本に一夜がつい重なりていつかおもひのたねとなる

九 眞事つくしてとけ逢ふ中も嬉し仮寝のたびまくら

十 浅イ心でついあまりこみ本に深いは恋のじやう(四才)

一 心ならぬまた取だしてしがむ反古のぬれもんく

二 本に夜毎にわはるはまくらいいつか替らぬ我が思ひ

三 ほれた私しじやどふなとさんせなぞと手くたで乗かける

四 心尽しも此身の仇か本にほいない里はなれ

五 しやんなげ首引さく胸のかんにん袋がぬはしたい(四ウ)

六 やがてはれたら思ひの俣としばし此身の軒の月

七 かよふ恋の夜道はほんに人目かねたる鳥おどし

八 盛る思ひの空さへ今は晴て世間をわたり鳥

- 九 しばし別れも苦になるつらさ思ひ啼する小夜千鳥
- 十 かよふ伝手なき闇路に迷ひ心とりつくむら千鳥 (五才)
- 一 恋にや苦勞のしのびの頭巾ほんにうかつにやぬかりやせぬ
- 二 定めないかやツイもや／＼と暗ぬいろもつむらしくれ
- 三 深くつもりし思ひの胸もとける時節を松のゆき
- 四 宵につもりし柳の雪も今朝はとけたるふりもない
- 五 背中そむけてすげなくぬしは空に夜を置こたつ (五ウ)
- 六 ほんに別れがつらいといふで名残夜明をかへる雁
- 七 秋の千草も夜の間のつゆにぬれて嬉しき色をもつ
- 八 浮気ながらも世けんを晴て味な色もつ女郎 (おみな) ばな
- 九 思ひ定めて手折し枝も人目兼たる道のはな
- 十 迷ひこんだる思ひの道に乱れ咲する野へのきく (六才)
- 一 本に色づきやゆだんがならぬじぶ柿にもむしがつく
- 二 エゝもにくひよ今宵の月よ暗たばかりですがない
- 三 すまぬ心と今宵の月はしばし人目の曇がくれ
- 四 同じ添寝の袖すり逢ふて友にぬれたる萩のつゆ
- 五 それた咄しか今宵は本に合ぬきぬたの拍子ぬけ (六ウ)
- 六 逢ふて咄しも聞ない内にゑぐひ氣じやとはどふよくな
- 七 つゝむつらさが此身にあまりやつれましたよ此とをり
- 八 ぬしの手切に此身はほんにふかく思ひましたよすくなる
- 九 出たり遁入たり此身はほんに外にしやんも有馬筆
- 十 袖を引とめ羽織をかくし逢ふて此まゝかへさりよか (七才)
- 一 愚知な五色の色あらはれてしやぼん玉ふくふくれづら
- 二 つらや此身は山ほとゝぎす啼にや此夜が明さるれぬ
- 三 なんぼすきとてどろたの中へはまりよこれるきりものが
- 四 そらにいけんを聞身はほんに恋にやうつゝか目がさめぬ

- 五 むだな手をさすつのりししやくも外に押入(を)して)が有わいなア (七ウ)
- 六 色けはなれた此身はほんにやつれすがたのかれ柳
- 七 合ぬ苦せつにへだてが出来てはなれ／＼に寐る今宵
- 八 勤する身にじやうずが出来て客にはらうり花もうり
- 九 やつれはてたるこの身はほんに思ひ入江に枯柳
- 十 思ふ当りに人目がなくば私しやん氣がして見たい (八才)
- 一 傍(あた)り見廻し人目をしのび家根でしゆびする手話の猫
- 二 暗ぬ思ひについはら／＼と落る涙のつゆしくれ
- 三 月夜からすと此身(ママ) 本に思はず一声啼寝入り
- 四 広い世見にせまいは住居今は気候の膳(さし) むかひ
- 五 きゆる思ひにはて氣がもめるなせにもへ杭火が付ぬ (八ウ)
- 六 人目なけねばどうかうもりとふかくおもひに更る月
- 七 はれた色どり今あらはしてたてゝ見せましょ虹の帯
- 八 あつさまぎれにりん氣と共にたゝくうちのは拍子ぬけ
- 九 宵の曇りに隠れた月が人の寐てからさへて出る
- 十 待身つらさのうつゝのゆめに仇にして闇明の鏡 (九才)
- 一 ほんに勤のつまともならばにくや男はたゞ一人り
- 二 我身わすれてくるふもむりか恋に氣が氣じやないものを
- 三 切てからんで柴垣にくやへだてする木が庭にたつ
- 四 知らぬおもひの種こそまして昼夜思ひの仇となる
- 五 明ぬ若戸が其仮あらば今朝の苦勞はせぬものに (九ウ)
- 六 あつこと葉につい乗せかけて先か眞事か石清水
- 七 露に添ふとははかないものをみらんらしくも月かすむ
- 八 あだにもまるゝ身はほうづきの末は根引の里はなれ
- 九 君をしたふのまつむしならでいまはそれとも草の中

- 十 露の道の辺踏分かねてひよんなこゝろのおきどころ(十才)
- 一 おだてさんすなそりや門違ひこれがじつならかくしやせぬ
- 二 煙くらへの吸付たばこぬしは氣を引事かいな
- 三 つゆにうつろふかれのゝはらに今は侘しき年の暮
- 四 へだてられてか見るさへいとゞ目さきかすまる袖の月
- 五 今はせけんもはれたる月と解て見せませす雲の掛(十ウ)
- 六 空なおもひの月とはほんにししのぶ開路もあるものを
- 七 かよふ伝手なき心の関をしらで住行須磨の月
- 八 末のちからの水すじあつてやせた根をもつ九十九草
- 九 千話のほうくでまゆげをかくしにあひますわのなんのかの
- 十 これが嬉しの涙と交りやいまをむかしのかたりぐさ(二十一才)
- 一 へだてある身のしのびの色は梅も開路の香をしたふ
- 二 月もこゝろ疊をおくしなぜか明りがたてにくひ
- 三 いとしかはいが此身にあまり寐るもねられずにくふなる
- 四 違ふた其日がおもひの種よ寐ても覚てもうつゝにも
- 五 いまの団(うち)はに鏡をつけるうつりやすひといふ事か(十ウ)
- 六 うつゝ笑顔にふとおこされて顔もあかつくまくらあて
- 七 もつれごゝろの悪性ものと風にすねたる糸柳
- 八 主のおもひも晴れたる今宵水に真事をてらす月
- 九 草の下水つゝむにあまり瘦て本意なく外にもる
- 十 当時流行の杓子でさへもいつか世に出て飯(ま)に添ふ(十才)
- 一 しらぬ水鶴に戸をたゝかれてふいと待身が明にたつ
- 二 苦絶しらけて寝る夜の床にあらぬおもひの夜着の中
- 三 ないて嘘ある世の中じやとてわらてまことがはなりよか

- 四 忍ぶ苦勞にあかしを立てとんだ蜜のすいが無い
- 五 深き契りの千代まつむしも秋の名残に声たゝぬ(十二ウ)
- 六 つとめする身じや盃やうけよがいやみさんすはうけにくひ
- 七 うつり易さの世をしのびして露も真事の草におく
- 八 水に苦勞をする身はほんに深くおもひにつくもぐさ
- 九 仇にそめてもこふなるからはもとふしらはにやなりやせまい
- 十 同じ月でも三夜はあだよ宵にてらして見たばかり(十三才)
- 一 たとへあだでも始の事よちれどうれしき瓜の花
- 二 ぬれたおもひを今朝あらはして恋にうつゝの目なし草
- 三 恋の浅瀬か水枯はてゝ深い中でもわけられる
- 四 色をもつ身の朝がほさへも露のひぬ間はたゞしぼし
- 五 にくや二人りの相合傘もくちにせりふの恋の衷(十三ウ)
- 六 解てうれしき帯こそいまはあだに結びし夢の中
- 七 あだな三すじによる身はほんにむねの調子が定まらぬ
- 八 咲かせられてのついで初が風のうはきに散さくら
- 九 袖をぬらした相合傘もすゑはらんちうになるわいな
- 十 思ひがけなき此身の関にいまは流もしのびみづ(十四才)
- 一 浪にたゞよふ月かげさへもゆられながらに添とげる
- 二 こぬに時さへ聞きたびれておもひやりさへ夢に見る
- 三 松により添ふ葉ざくらさへもともに背々色かさね
- 四 たまに逢ふ夜の此みじかさをこゝろしらずのあけがらす
- 五 時節おくれて世にでる花をかへり咲とはどうよくな(十四ウ)
- 六 鳥の音づれすまして聞ににくや羽風がうわきふく
- 七 すくなこゝろのみすやの針も主しの持やうで横になる
- 八 しげる中からたま／＼見せて苦勞する葉が色になる
- 九 おもひ切れとや夕部の雨のはれ聞しらぬ我おもひ

十 ほんにわたしは雨夜の星よどちらこちらの隔なく(十五才)
六 しほし待間もころがせける逢ふでおそならぜひがない
七 さそふ嵐にみだれもしよが花も籠にかゝるもの
八 深くかくせど若葉にまじるたれがさかせた残り花
九 文のたよりについほだされて恋によるへのつてが出来
十 咲ていれどもへだゝるものを人のつらさを花に見る(十五ウ)
草紙物板行おろし処

大阪心齋橋淡路町北へ入

川辺屋音次郎

同平野町

石川屋治兵衛(奥付)

A 歌占系統

Ⅱ 辻占文句のあるもの

2 番号を付すもの

① 詩入都々逸

『たゝみさん辻占詩入都々いつ』(三編。菊池真一蔵。明治初期刊か)

たゝみさん辻占詩入都々いつ(表紙)

吾妻をと子擲

おう卒あがく(見返し)

都々逸へ詩(からうた)を雑へ唄ふ事行はれ察行(そめき)の通客が美音夜はさらに昼もまた街衢(ちまた)の辻に喧(かまびす)し故にその唄ひ歩行(あるく)詩入とゝ逸の文句を直に辻占の種とな

し、此書の第三編と做し先序文をヤヤくさうです歟

吾妻雄鬼子述

○たゝみさんつちうらの見やう

このうらないのみやうはたゝみの上へかんざしにしてもなにゝてもなげいだしそのなげたるものゝ先のかたのあたりたるすぢより一トすぢ二たすぢとかぞへ十にてとまれば第十又廿にてとまれば第二十のどゝ一とわきの小がきのもんくをもつてそのよしあしをうらなへばいかなるむづかしきことゝいへどもあたらずといふことなしゆめくうたがふべからず(一才)

第一 ○あんたいなものサ

風にたなびくにしきのみはた(英雄旗下幾英雄野戦攻城敢道功)じつにいさましみ代はじめ(一ウ)

第二 ○いまにいゝひよりなるヨ

しめりがちだよわたしの袖は(黄梅時節家々雨宵草池塘処々蛙)ないてくらすをみえらしく(二才)

第三 ○うかれすぎちやアわるいと

ふんどしよ売ても一合かひな(春宵一刻価千金花有清香月有陰)これじや飲ずにや居られない(二ウ)

第四 ○ちつとはさはりのあるものサ

なみの音間がいやさに山家のすま居(独木為橋過小村幾竿修竹護柴門)それさへやつばりまつ(こゑ)(三才)

第五 ○このせつのくせだアね

かねは上野かまたあさくさか(山回縁柳常含雨天為紅桃不放燈)今日もあさから薄くもり(三ウ)

第六 ○もうちつとのしんぼうサ

まつは憂いとはけふ日のこの身(傷心欲問前朝事唯有江流去不回)

どこへふけたかうちの人」(四才)

第七 ○きついうちこみやうだねへ

貴身とふたりで世帯(しよたい)をもては(絹茅為屋竹為椽屋上背

山屋下泉)どんなすま居も苦にはせぬ」(四ウ)

第八 ○むかしかたぎがよいとサ

たとへも、とせあはづに居ても(心如金石志似松筠)みさをかた

意地たてとほす」(五才)

第九 ○まことにあんしんだヨ

あんじるやさきへ便りときいて(二接家書意便欲外封先已見平安)

すこしおち着むなきはぎ」(五ウ)

第十 ○くよくおしでないとサ

つる恋路をやまひにかづけ(約響銀環寛一寸逢人猶道不相思)し

らぬふりして居るつらさ」(六才)

第十一 ○ぬぐのはこれからおよしなさいよ

酒はさめるし夜は明かより(鷓声茅店月人跡板橋霜)ほねへ寒さが

しみとほる」(六ウ)

B おみくじ系統

一項目見出しで吉凶を示すもの

一五言漢詩句を添えるもの

『新撰善惡 辻うら都々一けいこ本 下の巻』(菊池真一蔵。多川里
曉撰。明治十二年九月。太田屋版。)

〔新撰善惡〕 辻うら都々一けいこ本 下の巻
多川里曉撰／木葉齋版／太田屋版。(表紙)

辻うら都度逸序

何事によらず思ふこと有もの易によつて善惡を占ひ御園をとつて吉
凶を定るは世の常のことになんされど仮初の事などには問ふべき事
にはあらざるべし只其品と時により思ふ先の心いき首尾の吉凶待人
には昔は歌占今は(一才) 辻占煎餅最中始は合ふといふなる義に
叶へど不來婦といふは禁句故是は氣をかへとち文の本まこと嘘の
虚々爽々御園によそへて歌占と辻占かたをかたとりて其吉凶をつけ
の(二ウ) 猶あらひ髪のさらりとわかる都々一による文句の判断
その身(ウ)の望もと何れ宜なに御すいもじと多川の里曉述るにな
ん(二一才)

此見ようは思ふ事を心に念じ右左りを定め信をとりて手に当る所を
ひらきみてさだめば本の右の方よき唄にあらば思ふ事すみやかに叶
ふなりあしき唄ならば急には叶ひがたしと知るべし余は是をおして
知り給へかし

○先の心いき ○まぢ人

○ねがひ望み ○身の上

○當時の事 ○行末の事

已上(二二ウ)

五十三吉 久困漸能安

くらひいひわけはれたときいてすこしあんどの明りさす

五十四凶 月蝕暗長空

しのぶ夜みちはくらきがたよりはれちやあはれぬ中ちやもの(十
六才)

五十五吉 華発再重栄

花もにをいもうちはて、今はみとなる夏の梅
五十六末小吉 生涯喜復憂

今はたがひにまことまことしよ手はうは気が小だのしみ(十六ウ)

五十七吉 前津逢浪静

風にもまれてたゞよひながらきしへつくかよあま小ぶね

五十八凶 有徑江海隔

とをくはなれてゐるかなしさに浮気されてもせひがなひ(十七才)

五十九凶 去住心無定

こゝろがらとて古きやうをはなれひよんな田舎のわびずまゐ

第六十未小吉 高危安可涉

およびないとはそりや氣のよはいはりのねがひも林とやら(十七ウ)

六十一吉 雲中乗縁至

ゆきのだるまとおまへのこゝろとけるたびことまるくなる

六十二吉 但存正公道

かほにやまよはぬすがたにやほれぬとかくさくらの花ははな(十八才)

六十三凶 黄金未出渠

とかく浮世はせつたのうらでかねがなければなりはせぬ

六十四凶 情深主別離

さきは主もちたよりはしれずいつて見たいにやかこの鳥(十八ウ)

六十五未吉 来危亦未蘇

あんなすなをなやなぎでさへも風にかたよる意地をだす

六十六凶 閑事惹風驟

かやとわたしが夜どぶしつられじつがないのかあきたのか(十九才)

六十七凶 枯木未生枝

はらをたつ田に氣を紅葉はのしかも恋しとなきあかす

六十八吉 異夢生英傑

たてたてい女はむだでもよいがせいしはほくにはならぬぞへ(十九ウ)

六十九凶 明月暗雲浮

わたしや野すへにすむみの虫よ恋しなつかし月のかほ

第七十凶 一心來趕縁

あいそづかしもせつないぎりと思ふてたんきを出しやんすな(二十才)

七十一凶 道業未成時

いへばたがひのはぢとはしれどいはねばりもひもわからなひ

七十二吉 戸内防重厄

からだばかりはだいにしやんせそばにあらるゝ身ではなし(二十ウ)

七十三吉 久晴漸分明

人もかうかかつひぐちらしくけんくわするのほれたじやう

七十四凶 事歳方成慶

今のくろふをしとけたのちにむかしはなしにして見たい(廿一才)

七十五凶 望月意情澗

おまへの出やうでぎりある人をすてるくふうもないじやない

七十六吉 富貴天之祐

ふくのかみさへまもりてあればなをもこがねがよつて来る(廿二ウ)

七十七凶 累滞未能蘇

ほどのよさそな人ではあるがどふも心がわからない

七十八大吉 前山禄馬重

ぬしがかせげばわたしもかせくともにたのしむ心だて」(廿二才)

七十九吉 残月未還光

もつたれないとはつひしりながらむりなねがひの神だのみ

第八十大吉 昇高過九天

ねんがとゞいてくわんおんさんやおれいまりのなり田さん」(廿二ウ)

八十一小吉 更愛得中和

岩にせかれてながるゝみづもすへにやまとまる滝つ水

八十二凶 新愁惹旧●(二)ンペン+「天」+「心」

あきがきたのをしうちでみせてきれる心かそりやひきやう」(廿三才)

八十三凶 高枝未可攀

あぢさゐのかはり安いは男のならひとでもひらかぬわしがむね

八十四凶 華開値晚秋

あきもあかれもせぬ中なれどぎりといふ字がじやまをして」(廿三ウ)

八十五大吉 望用何愁晚

まてばかんろの日よりがあるになぜか心がせきたがる

八十六大吉 華発応陽台

梅のむすめにやなぎのわかしゆ女びなを離のさくらいろ」(廿四才)

八十七大吉 盤石方逢玉

かむろみどりも時さへくれば松のくらあのもんじ

八十八凶

作事不和同
かうもしたらとしあんはつけどはなすひまさへなくばかり」(廿四ウ)

八十九大吉 方逢喜氣多

思ひおもふたねがひもかなひじつにうれしい身のくはほう

第九十大吉 応得費人推

岩にたつ矢もある世のなら心ひとつをまよはずに」(廿五才)

九十一吉 月桂又逢円

人のことばもやなぎにうけてくらすお人がねづよかる

九十二吉 前程宜進歩

雪やこほりのさむさをしのぎ梅も花さく春にあふ」(廿五ウ)

九十三吉 隔中須有望

おまへのころにへだてたところがあるゆへ何かにかどがたつ

九十四半吉 事忌梅前語

うれしがらせつまただまさせつわざはひまねぐも口がもと」(廿六才)

九十五吉 志気勤修業

しゆじんだいに事を大せつにしんぼしてくれ今しばし

九十六大吉 高林整羽儀

ぐちもいふまいりんきもせまい人のすく人もつくはほう」(廿六ウ)

九十七凶 佳人水上行

人めしので木曾路のはしよあやふひところが恋の味

九十八凶 欲理新糸乱

しよ手むすんでもつれてとけてごうかつたも恋のあや」(廿七才)

九十九大吉 紅日当門照

秋の日よりとあんじたときもはれてうれしい月の顔

第一百凶 禄走白雲間

つれてのかんせみやまのおくへふたりくらすをたのしみに」(廿七ウ)

(広告)

地本錦絵問屋 太田屋

明治十二年九月 日

御届

東京神田区鍛冶町十九番地

編輯出版元 武井佐吉 (裏見返し)

B おみくじ系統

Ⅱ 項目見出しで吉凶を示さないもの

『大しんはん流行たゝみざんよしこの』(菊池真一藏、木俣浅吉著、
明治二十三年一月七日出版。)

大しんはん流行たゝみざんよしこの (表紙)

このうらなひの見よふは男は扇又はきせる女はかんざし又はよふじ
ばしるいをたゝみへなげへりより目のかつをとりその番のところを
よみてうらなひて見るなり (見返し)

第老 (判断文省略)

嬉しい思ひを霞の袖につゝむ笑顔の山さくら

第二

しげり合ふたるたがひの中は色もかわらぬ松はやし (一オ)

第三

外に恋路が有松なぞとりんきしほりの仇ゆかた

第四

あけてかゝればお客がとうでしまん四階の高綱子 (二ウ)

第五

言いたきこらへてなでつけ髪にとけぬ恨の櫛たまり

第六

今はどちらもありひちつよく恋に意気ちの枕びき (二オ)

第七

おもひつめては夜の眼もほんにねづみ花火の苦勞する

第八

とんだ所から恋路のそれ矢的ちがひのやつあたり (二ウ)

第九

迷ひくるわのもどりの雨に内の身上も破れがさ

第十

共にそわつく氣も若草のぬれて色ます春の雨 (三オ)

第十一

? な人目を身内にあまり包み兼たる恋衣

第十二

吹けば舞うよな身の無い人に添うてしん苦を蟬のから (三ウ)

第十三

どふで浮名をひゞかすからにや二世も三世と婦夫連

第十四

ふつと恋風ふきあげ浜の内ぞゆかしきすだれ貝 (四オ)

第十五

心くもらぬ誠を友にうつし近江の鏡やま

第十六

羽織きせかけゆきたけ詠めたゝいたむかしを思ひだす (四ウ)

第十七

おこすもわるいでかんざしぬひて主のさんばつわけた居る

第十八

懐おしあけまた立咄しおしむみれんの別れぎわ」(五才)

第十九

とけて嬉しくねる夜の思ひ縋子にはかたのはら合せ

第二十

咲たが花やらさかぬがはなかさくをまつまがはなの華」(五ウ)

第二十一

アレサおよしよがらすですけるたゞさへ人目のおゝひのに

明治廿二年一月六日刻成

全 年一月七日出版

定価二銭

愛知県三河国額田郡能見町六十三番戸

著作兼印刷発行者 木俣浅吉(稟見返し)

C 易占系統

一算木図のあるもの

一 辻占文句のないもの

『辻占端唄』と『一大よせ』(菊池真一藏。2本あり。慶応二年以前刊か。春霞楼主人編。大坂河内屋茂兵衛・綿屋喜兵衛等版)

〔辻占端唄〕と『一大よせ 全』(表紙)

夫易は聖人の建る処にして強ち物を以て其名状を当る梓本儀にあらずと雖既に三國の代に官略あり亦我朝は阿陪清明ありて吉凶禍福を占ふ今や僕が普す所の恋題唄占は陳分漢の唐くさきを言ねど又大和言葉のいとやさしき三十一文字の歌にもあらで三筋の糸のいと

かなき都々逸の唄にて其意を知らしめんとは是ぞ童蒙兒女子等の独占ひ判断を心で做すの便りにもと余計御世話の所業ながら書肆の需に応じたり倘人あり心中の願事を「一才」人に知らさでしらんとならば算木まね銭まれにて乾兌離震巽坎坤の八卦六十四卦を占ひ上層の唄を讀ば善悪吉凶忽に知るべし尤下の唄は其易の変爻を表したれば上下の意違ふべし是は口伝ありといへど譬ば意中に願事ある節花の曇りの唄を聞ば乾為天としり其唄をよみて吉凶を占ふなり故に常に一本を懐中なさは途中にても進退を占ふに便利ありて実には有益の一大奇書ならんと爾云

東武 春霞楼主人識(一ウ)

乾为天(算木図省略。端唄省略)

果報まけてまごつくよりも時をしづかに待がよい

此卦は公家大名以上の貴人には吉なれども平人には悪し尤武士出家などには吉事と見ることもあり万事すゝみては凶世」(二才)

坤為地

心しづかにじせつをまてば岩に矢のたつ時もある

此卦は地の徳にして万物を生養するの形なりゆへに人の事に世話苦勞あり願望その外相談事段々とのふべし」(二ウ)

山水蒙

はじめわるくもすへよいならば手鍋さげるもいとやせぬ

此卦は童蒙の義なれば童の段々と智慧づゝとく宜きに向ふべし必ずいそぐべからず諸事了簡ちがひあるべし慎むべし」(三才)

水雷屯

先にもやくまでその気は有ど花にあらしの邪魔がある

此卦は草の始めて生じまた伸たるの意にて万事につけその兆はあ

れども相談ごと願望等にも邪魔ありてとゞのはぬなり」(三ウ)

水天齋

胸のもやくやいつかははれて月の顔見ることもあり

此卦も急にすべからずたとへば川留にあふて居るの意におもふべし

無理にわたらば怪我あるべし」(四オ)

天水訟

人の心はやぶれた屏風はなれ／＼の蝶つがひ

此卦は上下別々になりて相交はらざるの義背争ふの象也故に諸事

とゞのひがたく心身やすからずして憂ひかなしむこと多し」(四ウ)

地水師

人はな見ておる氣になればいつかをられし我花を

此卦は大人の徳あれば忠臣孝子には吉也たとへば一人の美女を恋慕

ふに大人ならば得べし小人ならばかへつて我物這人にとらるゝの象

なり」(五オ)

水地比

はれて夫婦の盃なしてこんなうれし事はない

此卦はしたしみありて人と相和柔するの卦也故に知音朋友親るゑな

どの力をそへらるゝことありて万の望み」と叫ぶなり」(五ウ)

風天小畜

たつた一重の障子じやけれどへだてられてはあいかぬる

此卦は物ごと塞りとゞむるの意あり又目に見て手にとられぬ象なれ

ば万事急に脚ひがたく常にしんくのかさなりて憂ふるすがたなり」

(六オ)

天沢履

こわいとうげをしのびてこせば今じや枕で高いびき

此卦は礼義の心あり又進むの義あり又進むの義あり始は賤くことあ

れど後には喜となる故にあやふけれ共破れず驚けどもやすし」(六ウ)

地天泰

月もみつればかくるがならひらくは苦のたね苦の世界

此卦は貴人にはよし常人は悪し替修安逸のこゝろ楽きは??かなし

み生じ又月なかげをすだくやみをむかふの象なり」(七オ)

天地否

はじめや深山のすまゐをしても末にや都の月をみる

此卦は物ごと塞りて通せざるかたちなれば末には栄ゆる卦なれば辛

抱専一とすべしつひには志をとぐるの時あるべし」(七ウ)

天火同人

心清けりや末にはつひにみそこしすてゝ玉のこし

此卦は人心同じくして親み深き意にして万事正直なれば人の取立に

あづかり立身出世あるべししかしその心まがれる人には大凶なり」

(八オ)

火天大有

朝顔のはなはきれいにさくとはいへど盛りみちかくちりやすし

此卦は天上に有て照わたることく人も時を得たるなれどこれも位ま

けのしてすへて損失おほく苦労あると知るべし」(八ウ)

地山謙

こんなお福とひげしておればとんだ福者に身をよする

此卦は先に屈んで後に伸るの卦也ゆへに何ごととゞのひがたく苦

勞多ししかれども身をへり下りてをれば後によきこと来る」(九オ)

雷地予

龍も時くりや天へものぼるわしも時きてぬしにそふ

此卦はよろこぶの義あり雷地上にふるひ出て天にのぼるの時也万物

和順して人もおもふ俣に立身出世のよろこびあり」(九ウ)

沢雷隨

いつそこをば倉がへなしてぬしのみまゝな判にしな

此卦は小女長男に隨ふの意あり我動かれ悦ぶまた枯木重ねて茂る卦なれば物の變りて吉ゆゑに住所をかへて利あり」(十オ)

山風蠱

棒ほどねがへど針ほどきかぬほんにうきよはまゝならぬ

此卦は山中に風を含みて吹出し懐るの意にして諸事につきて難義迷惑する事ありゆゑにすべての願望叶ひがたし」(十ウ)

地沢臨

とかく女は柔和になしてほれたと見せずにはれしやんせ

此卦は貴賤相交りて親むの義なり故に物事柔和にして吉剛氣なる事あしし換合より難渋なと言かけらるゝ事あるべし」(十一オ)

風地觀

おもひがけなき雨にはあへどはれてことなき夏の空

此卦は晴天に雲の起るごとく思ひ奇ぬこといできて苦勞あるべし然れどもその雲を風の吹はらへばさらに障りなし」(十一ウ)

火雷噬嗑

はるの泡雪とくるも早き夫婦げんくわの闘の中

此卦は頤の中に物あるの意にして障りあれどもかみ合せて通するの義あれば始め調ひがたくとも後には調ふべし」(十二オ)

山火賁

ぞつとするよな器皿のうへにしきませたら猶よかる

此卦は虎の林を出て遊ぶの象なれば物のうるはしく又威あるの意なり立身出世あるべし賂の願ひ叶ふべししかしよくかわくべからず」

(十二ウ)

山地剝

仏いぢりをさらりとやめてけふより精進おちました

此卦は枯木の栄花を斃するの卦なれば今より新規に物を取始むるによろし然れども高きより落たる象あれば人も身の上安堵ならず」(十三オ)

地雷復

たとへ一度ははづるゝとても思ふ的ならばづしやせぬ

此卦は家を破りふたゝび復すの意なれば一度は悪くとも重ねては吉事に向ひ諸事おもふところを成就すべし」(十三ウ)

天雷无妄

玉も包めば光りがしれぬぬしもころをあかしやんせ

此卦は石中に玉をつゝむの卦なれば諸願叶ひがたし時の至らざると知るべししかし己が欲にせざる事なれば願ひ叶ふべし」(十四オ)

山天大畜

水は下へとながるゝものを上へ船やりや逆となる

此卦は乾良あい逆するかたちにて住居常にあんおんならずふだん心中にいかりをふくみ恨みをおもふゆゑ安氣ならざる義なり」(十四ウ)

山雷頤

雪をかきわけ桜はさかぬとかく時節を待がよい

此卦は養ふ義にして物の成就する卦なれどもしかし時節の未はやき意あり急にすることはよろしからず」(十五オ)

沢風大過

きれた風ではわしやなけれどもちうにまよひておるわいな

此卦は棟樑のかたちなり上することならず下載ることならず中に迷

ふの意なり故に何事も不定にして思慮やすからぬなり」(十五ウ)
坎為水

男心は紫陽花よいつと定めぬ花の色

此卦は難義困窮の卦にて二人水に溺るゝの象なれば遠く住所を去てよし常にかわる怪しき意有と知るべし」(十六オ)

離為火

はつと立たるあの村千鳥風のまに／＼わかれゆく

此卦は離別の卦なれば親子兄弟或ひはしたしき朋友などに別れ遠ざかるなり然れども学者出家などには大吉なるべし」(十六ウ)

沢山

寝こみへ持こむこの牡丹餅はほんにうれしい口果報

此卦は感通して物の速に調ふの卦なり故に思はざる吉事ありて万の願望万事向ふより深切に世話してくるゝなり」(十七オ)

雷風恒

風に吹ちるあの紅葉はどこへよるべきあてもない

此卦は物の散失するの意あればあつまると思へばちり散と思へば又集るゆへ更に定まらぬ世住所につきとかく苦勞ありと知るべし」(十七ウ)

雷天大壮

虎に角ありやいひぶんないがそれじややつぱりがいになる

この卦は陽気さかんにして仕はすなはちさかんなれども花ありて実なきがごとく大吉に似て吉にあらず金銀財宝にくらうあり」(十八オ)

天山遯

いつそ深山にかくれてゐたらこんな苦勞をしやせまい

この卦は退くよみ住所などについて辛苦多く思慮ふんべつも定まら

ず諸事間違ひのある卦なり願望は邪魔するものあり」(十八ウ)
火地雷

ぬしとわたしは朝日の症で昇りかけては下りはせぬ

此卦は日の地上に出るの象ありて次第／＼にはん昌して立身出世におもむく意あり又人より親み敬まはれ上たる人の恵みにあふべし」(十九オ)

地火明夷

三世相にもよくあるやつよ始めわるくてのちはよい

此卦は日の地中にありて分明ならざるの意あれば始めは思ふ処をうしなひ難義をすれど後には栄花の身ともなるべし」(十九ウ)

風火家人

世帯の車は女の事よ糸をとる気でよくまはず

此卦は家内安寧するの卦也万事によること婦人以てすれば吉なりしかしながら当世の人かくのごとくなる女少し大に撰ぶべし」(二十オ)

火沢睽

しん気辛苦の種蒔ながらとかく宝の芽を出さぬ

此卦は人心相そむきて万事ことなりがたし故に人中辛苦多く又財宝散乱することありしかし学者などには大吉ありとす」(二十ウ)

水山蹇

あきが来たとして梢の蟬もほんに朝ばんなきあかす

此卦は寒中に蟬風をかなしむの意にして又龍の玉をうしなふの象也ゆへに宝さんさいして甚しく貧苦にせまるの卦なり」(廿一オ)

雷水解

やつと苦界のかどとび出してそらに羽をのすはなし鳥

この卦は魚の網を通れ出たるの意にてなやみ解ちるなり故に難義なる所をのがれ出る卦なりしかれども慎まざれば再び災あり」(廿二ウ)

山沢損

勘定づくには浮世はいかぬ損して徳とることもある

此卦はもと減少とて物の損失ある卦なれども却て宜とする象あれば後にいたりて利徳をうるか又誉れあるか末よき卦也」(廿二オ)

風雷二

みづがうこげは船までうこくほんにあぶない浪のうへ

此卦は上下とも動きてしづかならず故に住所やすからず心身定まらず辛苦ありて思ひよらざる損毛有慎むべし」(廿二ウ)

沢天夬

床にすへたるあの芥子の花そつとおかねば花がちる

此卦は剛強に過るの卦なれば性急にして万事やぶるゝなれば慎むべし故に人は堪忍柔和をむねとしてかりにも情をおもふべし」(廿三オ)

天風姤

やつとあつめしあの落葉をば風がおとして吹とばす

此卦は物のあつまると散うせる象ありて定りなきぎなれば人も分別工風さだまらずして迷ふ也又おもひ寄すあひあふの意あり」(廿三ウ)

沢地萃

人のあつまる両国はしは常にけんくわのたへはせぬ

此卦は物の集会してはん昌するの意なり故に又争論障り常にあれば慎むべし願望かなふべし婦人のさまたげすることあるべし」(廿四

オ)

地風升

もとは二葉の芽ばへだけれど家となるやうに木にもなる

此卦は草木の地中に有て次第く／＼に地上に発生する意なれば段々と立身出世をすべし」(廿四ウ)

沢水困

わしが思ひは百分が一もぬしのかたへは通ふじやせぬ

此卦はこんきう難義の卦にして諸事ふじゆうに我ゝろざし人に通達せず苦勞多き卦也」(廿五オ)

水風井

もと木にまされるうら木はないに心づこかす事はない

此卦は万事あらためかへることよろしからず各あたりまへの職分をつとめみだりに新規の事にとりかゝる事なかれ損ありて益なし」(廿五ウ)

沢火革

うしを馬ならのりかへしやんせ願ひかなはぬ事はない

此卦は万事改むるによし今迄なすことに益なければ速にそのふるきを捨て新しきにうつるべし願望障りあれどもゝのふべし」(廿六オ)

火風鼎

ふゆの水と心がとけぬそこで口舌がたへはせぬ

此卦は常に口舌のたへぬ卦なれば慎むべしゆへに願望思ふまゝに叶はずして病ひの変あるべし是おそるゝとやぶるの意あれば也」(廿六ウ)

震為雷

声はなしても姿を見せぬ雲間がくれのほとゝぎす

震為雷

此卦は声ありて形なきの卦なれば祥福ありてはん昌の象なれども大
てい平人にはよろしからず位まけることあるべし」(廿七才)

艮為山

そこは土窟(どぶ)だに用心しやんせ跡へかへれば怪我はない

此卦は止るによく進むに損あり憂喜の山重なりたる義とす故に
物ごと半は脚ひ半は通達すべし」(廿七ウ)

風山漸

野辺にはへたるあの若松もすへにや枝葉の生茂る

此卦は山上に木をかへて茂生するの意にて立身出世あるべし又女の
男を思ふの卦なるゆへ婚姻とゝのふべし」(廿八才)

雷沢帰妹

おもひ願ひはみな違ひ翹床のすへものわしやいやじや

此卦は不意にまちがひの有卦なれば慎むべしまた色情につきて苦勞
あり且願望さまたげあり」(廿八ウ)

雷火豊

水にうつれるあの月影はめには見るのみにて手にとれぬ

此卦は盛大の勢ひある卦なり然れ共余り大すぎて却つてそのかたち
を失ふたとへば水中の月のごとく目に見て手に取れぬ意なり」(廿
九才)

火山旅

花もつばみが匂ひはふかいひらきすぎては曲がない

此卦は始めよろしく後よろし万事に付つゝしむべし又月の半出たる
意あれば少事はよしその心にて占ふべし」(廿九ウ)

巽為風

あたる矢さきを風ゆへそれて思はぬ苦勞もするわいな

此卦は通達の意ありておもふことを遂るの卦あれど横合より思ひよ

らぬ障りありて事を仕そんずる事有べし」(三十才)

兌為沢

こゝろはやしやでも菩薩でも顔にたれしも迷ふはむりもない

此卦はよろこびの顯はるゝ卦にしてよき卦なれども物事取しまりな
く埒あかぬ意あり外見はよく内心よからぬの意あり」(三十ウ)

風水涣

うきくさのなはきれいにさいてはあれど風のふくたびみだれあふ

此卦は物のちりとくるの意ありて悪事の身を離るゝの吉兆とす然れ
どもちりみだるゝ義あれば損失あるべし」(三十一才)

水沢節

小さな石でも邪魔するときは大きな車もうごきやせぬ

此卦は物事滞りてさはりある卦也ゆへに運つたなくとちふさがる象
にて方の願望叶ひがたきと知るべし」(三十一ウ)

風沢中孚

おのが心を善悪ともに鏡にうつして見やしやんせ

此卦は誠あるの卦にして心中正直でいねいなければ吉とす我邪の心あ
れば大凶にして目前にばつあるべし」(三十二才)

雷山小過

ひとつ叶へば二ツのふそくほんにねがひはたへはせぬ

此卦は物の十分にみてんとすれば又不足のことを発し脚ひがたき卦
也しかし大きな災なけれどもつねに苦勞あるべし」(三十二ウ)

水火既濟

おもひみだるゝ風野のすゝきとくにとかれぬ胸のあや

此卦は物の乱るゝ始めとす故に一旦は成就するとも末には破るゝ也
色情の事に苦勞あるべし慎むべし」(三十三才)

水火未濟

なんぼきれいな花びらとても落たうへにて実をむすぶ

此卦は物の成就する卦なり然れどもいまだ用をなさずといへど後相まじはることを吉兆とするゆへに願望とふべし」(三十三ウ)

九曜星の吉凶の事

日曜星

風をうけたるあの帆懸ぶねおもひどふりにのしてゆく

此星にあたる年は万よくして家業はんじやうすべししかしゆだんをすれば損あり」(三十四オ)

月曜星

旅もするもの思はぬ所で金の弦をばほりあてる

此星にあたるとしは万事よしたび他国して仕あはせよく思ひよらざる幸を得る事あるべし」(三十四ウ)

羅喉星

せんじつめたる葉のやくわんみがきあげても光りやせぬ

此星にあたる年は大いに悪く財宝をそんするか又は病難あるか親るい他人の殊によりて辛苦あるかなり」(三十五オ)

土曜星

さきのきれたる箒じやないがはかなき此身のさつしやんせ

此星にあたる年は万事よろしからず望みごと願ひ事何ごともしも一切かなはぬ年なれば慎むべし」(三十五ウ)

水曜星

ぐるり／＼とまはりておれば水るひまなき水車

此星にあたる年は先よしといへどもその職におこたるときは悪しゆへに随分精をいたせばよろこびごとかさなるべし」(三十六オ)

金曜星

若葉のうちをばたいじにすればすへにや枝葉のおひしげる

此星にあたる年は春のうちはあしく親るいか父母にはなることあれどしん／＼すればよろこびごと重なるべし」(三十六ウ)

火曜星

江の鳴細工のびやうぶぢやないがばら／＼はなる春の雨

此星にあたる年はよろしからずおや兄弟親ぞくにはなれることあるべしさもなきときは金銀財宝をそん失なすべし」(三十七オ)

計都星

水かさまざりしあの泪川わたりかねたる世のたつき

此星にあたる年は万事大いに悪し泪のかわく間あるべからず尤夏のうちは別して悪しといへども秋より少しはよし」(三十七ウ)

木曜星

かさね／＼のめでたい事にかさね／＼の酒をのむ

此星にあたる年は万よししたとへは春にあふて木の芽をいだすがごとく次第にうんのひらきて幸をかさぬべし」(三十八オ)

生れ性十枝の吉凶

奇光枝 きのえのとし

おもふことかなふ福介打出の小づちおかめに見てさへ楽隠居

此枝に生るゝ人はわかきときはひんなれども段々と思ふことくになりて末には大いなる福徳を得べし」(三十八ウ)

金財枝 きのとのとし

行末は海となるまべき谷水なれどしばしこの葉の下をゆく

此枝に生るゝ人はわかきときはおもひことたへず人にあたまをおさるゝなれど次第に出世をなして大海のひろきへ出べし」(三十九オ)

千歳枝 ひのへのとし

もとは裾野をとふりて来たがのぼりますぞへふじの山

此枝に生るゝ人は段々富貴にいたり官にすゝむの相ありてつねに目上の人に愛せらるゝゆへ引立にあづかり出世をなすべし」(三十九ウ)

銀宝枝 ひのとのとし

かぜに羽をすあめのかのぼり糸のひきてのあるゆへに

此枝に生るゝ人は前に同じく貴人高位のてうあいにあづかり段々と幸を得べし信心うすき人は苦勞あると知るべし」(四十オ)

散高枝 つちのへのとし

萍のしかところはさだめぬけれど花もさくなり爽もむすぶ

此枝に生るゝ人は田畑にえんあるといへども常に住所につきてもの言たへず苦勞ありしかし財宝にえんありて十方よりあつまるべし」(四十ウ)

(四十ウ)

天高枝 つちのへのとし

うめと桜は一時にさかめ咲ぬはづだよ時がある

此枝に生るゝ人は無口にして空言をいはず福分ありて命ながしといへども子なし若子あるときは福分ありといへども老てまづしくなるべし」(四十一オ)

五柳枝 かへののとし

猪しゝむしやともいふならいやれ義を見てうしろは見せはせぬ

此枝に生るゝ人は上へは心しづかにして下へはげしく学文に心ざしあり但し短氣にて財宝身につつかねど義を見てはあとへ引ぬ性なり」(四十一ウ)

虚部枝 かへののとし

所がへしてすゝめじやさへもひなをそだつる親鳥のおん

此枝に生るゝ人は正直なれども心たけくおやに不孝なるべしゆへに

住所をかゆるのなやみあり孝ならばよし」(四十二オ)

豊陽枝 みづのへのとし

人はなにもいはまのつゝじこちは春くるときをまつ

此枝に生るゝ人は心しづかに時節をまつべし思ひよらぬさいはひにあふべしとかくに剛氣のことを慎むときは大いによし」(四十二ウ)

柳復枝 みづのへのとし

たとへおふくと笑はゝわらへみめより心がしんの玉

この枝に生るゝ人は心正しけれども人のそねみをうくべし殊に女はみめかたちうるはしくして妬をうけ大難にあふべししん／＼をなすべし」(四十三オ)

十二支生れ年吉凶

子年 坎中連

三味線のどうせはなれる二人がなかはきれた糸ならかけかへる

此年に生るゝ人は衣食にえんありて常にしづかなることをごのむ性也しかしふうふのえん薄くはじめの縁かはるべし」(四十三ウ)

丑年 艮上連

はしめ大きく中たびへこみ末にやふくれるなりひさし

此年に生るゝ人は身上はじめはよく中ごろ悪くなり年よりて又仕あはせよくふつきはんじやうなるべしもつとも此人はちえかしこき生れなり」(四十四オ)

寅年 艮上連

からみついたる葎草とても秋の末にはうらがれる

此年に生るゝ人はさいなんおゝくしてその身わづらひたゝるべししかれども三十過てより段々と仕あはせよく財ほうにえん有べし」(四十四ウ)

卯年 震下連

梅よ桜よ柳よ桃とさうは両手にもてはせぬ

此年に生るゝ人はちえさいかくありといへども余り諸芸をならぶ事多くしてとげがたしもつとも財宝にえんあるべし」(四十五才)

辰年 巽下斷

文字にかいても身をたつのとしのほりますぞへ墾までも

此年に生るゝ人はちえかしくともほうばいの中ねんころにして段々と立身出世をなすべししかし女房のえん薄くたび／＼かはるべし」(四十五才)

巳年 巽下斷

一升つまらぬ五合のうつわひろくもたんせん心もち

此年に生るゝ人はこゝろちいさくして常におもひことたへず又人をそしりねたむ性なりこれ前生は女人なりしゆへ業ふかければなり」(四十六才)

午年 離中斷

千両の鷹もそのばで放して見ねば芸のよしあしわかりやせぬ

此年に生るゝ人はとかく父母の愛あつくしてその手元をはなれざれども却つてたゝることあるべし別に家やしきをもちてよし」(四十六才)

未年 坤昏斷

かねの宝はつみおくととも金でかはれぬ子の宝

此年に生るゝ人は前生にものゝ命を多くとりたるむくひにて今生にては子のえんうすくたゝるべししかし財宝はみちたるべし」(四十七才)

申年 坤昏斷

質屋のばんとうくどくにさへも言葉おゝきは品がない

此年に生るゝ人はつねにことば多きさがゆへしせんずることありつゝしむべし又たび他こくをかけまはり辛勞することあるべし」(四十七才)

酉年 兌上斷

道の真中にはへたる草はあたまあげるとふられます

此年に生るゝ人はとかくにうんをおさへらるゝかたちありて若年のうちはくらうたへすかつ親兄弟にえんうすけれどちえ才かくはあるべし」(四十八才)

戌年 乾昏連

小川ながるゝ落葉を見なようきつしづみつ海へ出る

此年に生るゝ人は若年のうちはたび／＼うきしづみありて苦勞あれどもすゑには大海へ出しごとく立身出世をなすべし」(四十八才)

亥年 乾昏連

瓜の種まきなすびははへぬあくのむくひにせんはない

此年に生るゝ人は前生に善根をまきしゆへその徳にて今生にても衣食にことをかゝずまんぞくなり又手のげいありて財あつまるべし」(四十九才)

五性の善悪

木 東の方 青色 歳星

のぼるあさひのいきほひつよく四方にひかりをしくわいな

此性にうまるゝ人は朝日の昇るいきほひありて誠にめでたく時めくべし尤万事ひかへめにすべし」(四十九才)

火 南の方 赤色 熒惑星

赤いしかけはめにつくけれどきのみうまみはありやせまい

此性に生るゝ人はめのうへの人の引立にあづかるといへどつひにはわかるゝ事あればつゝしむべし親兄弟に縁うすし」(五十才)

土 中央 黄色 鎮星

道もまん中とふりておればどぶへおつべきわけがない

此性にうまるゝ人は万事ひかへめにして何事も中道をゆけば大いによし少しにてもこゝろにゆだんなさは大なるわざはひにあふべし」(五十才)

(五十才)

金 西の方 白色 太白星

月もみつればかけるがならひ山ものほればくだらんせ

此性に生るゝ人はあまりうんよくして一時に出世をなすといへど極まりありて又段々とあとへもどるなればかならず油断すべからず」(五十一才)

(五十一才)

水 北の方 黒色 辰星

花はさくとも深山のさくら人の見られぬ口おしき

此性にうまるゝ人はちえ才かくありといへど人の見だしにあづからず一生うもれてくらすべしこれあまりそのこゝろのいんきなればなり」(五十一才)

(奥付)「裏見返し」

C 易占系統

1 算木図のあるもの

1 辻占文句のないもの

『つじうららび』上『菊池真一藏。弦声堂主人序。明治五年。松延堂板。』

辻占都々逸 乾の巻」(表紙)

つじうららび 上

松延堂はん」(見返し)

古人の曰く易に益たり事に臨んで先其吉凶を考へ而して進退す故に悔なしと云々しかれども其意ふかくして学ばずしては解がたし依之今都々の章句を易の封面に当其善惡ををしるす是然ながら易の益たるにあらずや

明治五壬申春

弦声堂主人記」(二才)

ひけすぎに客をかへして」(二ウ)あのみち合のつじでとるのはぬしの占」(二才)

つるべとられたあさがほよりも露のひぬ間にもらひなき」(二ウ)乾為天(算木図省略)

たつとき人にはよし平人はわろし万事つゝしむべしねがひ事叶がたしたひ立凶まち人きたらず

のほりつめたる五階のはしこ人のぬけんもうはのそら」(三才)天風后

女一人男五人にましはるかたち万事とりしまりなしねがひ事かなひがたしまち人おそくとも来る

てきはだせいみかたはひとりわたしや女できがもめる」(三ウ)天山逐(ママ)

万事すゝんで利なししりぞひてときをまつべしねがひ事月をこへて叶ふまち人おそくきたる

あきもあかれもせぬかなれど義理といふ字でなきわかれ」(四才)天地否

はじめあしくものちにはすこしよし〇ねがひことさわりありてはかどらず〇まち人はとちうにとゝまりておそし

しやうじひとへも人目のせきよものいはれぬ身のつらさ(四ウ)

天沢庵

こほりをふむことくなるあやふきことあれどもさはりなし吉ねがひ
事いそいでわゆるしまち人きたる

部屋ややりての目がほを忍びあげてうれしいとこのうち(五オ)

天留无妄

すこしおどろく事あれどもさはりなし○ねがひ事人をたのみてよし
○こんれい吉まちびときたれどもおそし

むかふかゞみにやつれたかほをうつし心でくやみなき(五ウ)

天水監

万事あらそひくぜつありてしんばいありつゝしむべしねがひ事てま
どるまちびとおそきたる

いへばどふやらぐちらしけれどいはにやうはきがなほつる(六

オ)

天火同人

もの事あきらかにしてよしつゝみかくしてはあしくねがひ事かなふ
○えんだんよしまち人すみやかにきたる

人をたのんでわたりをつけてせけんはれての女夫中(六ウ)

兎為沢

よろこびあれどもとりへりなくをだはらひやうぎなりねがひ事なる
やうでならずまちびとたよりあり

わけもないことわけあるやうにいはれりやぎりにもせにならぬ(

七オ)

沢水困

しんばいくらうおほく物にくるしむかたちなりねがひ事てまどるま
ち人きたるべし

ぬしの心はいまひき沙でふちも瀬となるあすか川(七ウ)

沢地萃

にぎやかにてはな／＼きていなり見るところはよけれど内にく
らうあり○ねがひこと不叶○まち人きたる

ほどもきりやうもよしのゝさくらこれは／＼といふばかり(八オ)

沢山威

引よりよきことのつげ有万事吉にむかふかたちねがひ事人にしたが
ひてよしまち人てまどる

ねんがとゞひてこよひのあふせこれでわかれがなけりやよい(八

ウ)

沢火革

万事あらたになるかたちふるきさつてよしねがひ事ことをかへてよ
しまち人きたる

沢風大過

まつもかれ葉をみなかりこんでしんきしんめがよいはいな(九オ)

女につきあらそひくぜつことありつゝしむべしねがひことかなひが
たしまち人きたらず

ぬしはうはきな田毎の月よどこへまことをてらすやら(九ウ)

沢留隨

目上の引立あるかたちなれば人にしたがひてよしねがひことかなふ
えんだん吉まち人すみやかにきたる

ふたりくらさは深山のすまゐしばかり手わざいとやせぬ(十オ)

火水未濟

わたりにふねなきかたちにしてこゝろさらにさだまらずねがひ事て
まどるまちびときたらす

月はかたむくよはほの／＼とまたぬひとこゑほとゝぎす(十ウ)

沢天夫

しあんくふうさだまらざるかたちなり○ねがひ事こゝろまよひてら
ちあかずまぢ人おそし

うたくりぶかいといはんすけれどほれりや心がなほまよふ(十一
才)

離為火

わかれ又あふ事をつかさどる小事に用ひて吉火事に凶ねがひ事あら
たなるをよしとすまぢびとおそくともきたる

かなくぎのをれのやうでもゆかりのふみはまもりぶくろへいれてお
く(十一ウ)

火山旅

とりのすをやかれしごとくぢうしよにつきくらうありねがひ事叶ひ
がたしまぢびときたる

あふはわかれのはじめとしれどいまさらかなしいこのわかれ(十二
才)

火風鼎

物事あらたにさだまるかたちなり吉○ねがひ事かなふこんれいたひ
だちわたましよしまぢ人おそし

おきやくつとめてかへしたあとでぬしとふたりでこなへだて(十二
二ウ)

火地雷

ものごとさかんなるかたち世万事すゝんでよしねがひ事すみやかな
るに吉まぢ人きたる

ぬしを思へばてる日もくもるひくさみせんも手にやつかぬ(十三
才)

火天大有

万事さかんなるやうなれ共さらによろしからずねがひ事てまどるな
りまぢ人きたる

一両がはな火まもなきかぎやのふねよほめるあいだにきへてゆく(十三
二ウ)

火沢睽

万事こゝろ／＼なるかたち世人の心そむいてこととゝのはずねがひ
事さはりあり不叶まぢ人きたらす

どふせまかせぬつとめのからだじつもふじつになるつらさ(十四
才)

火雷噬嗑

くちにてものをあちはふことしせんあくをかみわけてよしねがひ事
かなへどもおそしまぢ人きたる

あだなさくらのちりゆくのちにまつのみさほはよくしれる(十四
ウ)

震為雷

万事ざわ／＼としてこゝろやすからずうごかたちありねがひ事く
らうして後すこしくかなふ○まぢ人きたる

まつがつらひかまたるゝわしがうちのしゆびしてでるつらさ(十五
才)

雷地予

あらかじめものごととゝなふかたちなり○ねがひごとかなへどもお
そし○こんれい吉まぢ人きたれどもおそし

そひとげる人もはじめはふとしたことよほれたがえんではあるまい
か(十五ウ)

留水解

くらうしんばいしりぞきおひ／＼よきかたにむかふ世ねがひことお
そくかなふまぢびときたれどもおそし

滝の水いはにせかれていちどはきれるすゑはながれてまたひとつ
(十六才)

雷風恒

あらたなることにはあししふるきをまもりてよしねがひことかなへ
どもおそしまぢびとてまどる

たとへどのやうなかせふくとてもよそへなびくないとやなき(十
六才)

雷天大壮

そときかんにしてうちおとろへるかたちなりねがひ事さはりありま
ち人とちうにとゞまる

よわいからだでげいしやのつとめしんぼしてくれもうすこし(十
七才)

雷山小過

大きなこと用ゆべからず小事に用ひて利ありねがひ事叶ひがたし
まぢ人きたる

しらつゆやむふんべつでもくさばがたより恋のうき身のおきどこ
ろ(十七才)

雷沢帰妹

女のことにくぜつことありものことつゝしみてよしねがひ事ほねを
をりてかなふ○まぢ人きたらず

ぶたれるかくこのわしやむすびがみいろであふときやかうちやな
い(十八才)

雷火豊

ほかにほゆたかに見ゆれどうちにくらうありねがひ事あしくまぢ人

きたれどもおそし

ちればこそ花はよけいになほをしまるゝくらうするのは色の花
(十八才)

C 易占系統

II 白丸黒丸図のあるもの

1 辻古文句も判断文もないもの

『こゝろいき辻うらら』(菊池真一蔵。刊年不明。明治初期か。
越村屋平助版。)

こゝろいき辻うらら(表紙)

新選六十四卦

心意気辻占都々一

東都 越村屋平助版(見返し)

此うらなひの仕やうは常に信心する所の神仏をいのり心に思ふ事を
念じ何とぞ吉凶を告給へと錢三文つゝを両の手にてよくふり二度な
げいだし形のかたを黒とし波のかたを白とし本文の○●にあはせて
うたのよしあしにて其身のねがひ望身の上等に引くらへ唄の心をよ
くすいりやうしてはんだんすべし善悪ともに其人の信ずるによる所
にこそ(凡例オ)

一 縁だんの吉凶

一 男女の相性

一 願ひのぞみ

一 待人の遅速

一 一身の上の考

一行すゑの事

鏡にあらざれば何にても表うらあるものを右の易にあて用てよし
(凡例ウ)

●●●●●●●●乾為天

思ふ念力とゞいたうえは行世つきせぬさゞれ石」(二オ)

○●●●●●●●坤為地

ひんなくらしにおもはぬおまへすえのとげやうはずがない」(二ウ)

○●●●●●●●水雷屯

神谷仏のちかひもあらばやがて其身もすみ田川」(二オ)

●●●●●●●●山水蒙

ぬれたことからつい吉にやんで娘」の五月雨」(二ウ)

○●●●●●●●水天需

壁に耳ある世の中なれば隠しおうせることはない」(二三オ)

●●●●●●●●天水訟

露にうかれて来ててふ／＼も風がちやまする世のならい」(三ウ)

○●●●●●●●地水師

水をあげてもためなをしてもいけて久しきものぢやない」(四オ)

○●●●●●●●水地比

しんの余城ぢやわしやないけれど思ふ念力おもふ程」(四ウ)

●●●●●●●●風天(ママ)

なしたなんぎはのがれもしやうが人に天震まぬがれぬ」(五オ)

●●●●●●●●天沢履

まるに井の字は白井の水よあらいあげたる小むらさき」(五ウ)

○●●●●●●●地天泰

かへる「金手紙をわたしやがて燕のへんじして」(六オ)

●●●●●●●●天地否

園の手形は言葉とやらで人にゆだんはなりやせまい」(六ウ)

●●●●●●●●天火同人

梅と竹とをなるべく植て千代に八千代にはなの兄」(七オ)

●●●●●●●●火天(ママ)

およばぬねがひはいのらぬものよ天にとゞかう竹はない」(七ウ)

○●●●●●●●地山謙

うきな辰巳の小まどをあげて主の来るのを松の風」(八オ)

●●●●●●●●雷地予

はらを立田の紅葉はいやよ顔のあからむことぢやもの」(八ウ)

○●●●●●●●沢雷隨

月の下ゆくあのむら雲はよその見る眼もかくすだろ」(九オ)

●●●●●●●●山風蠱

千里ひと飛恋にはうときとらの位をかる野良狐」(九ウ)

○●●●●●●●地沢臨

人におくれてたゞ何こともふくの来るのをさきになる」(十オ)

●●●●●●●●風地觀

風の本の葉はついちりやすいはやく背葉は跡になる」(十ウ)

●●●●●●●●火雷噬嗑

身をばたゞへりくだりたる浮世は安くくらしそがすはかどらず」
(十一オ)

○●●●●●●●山火賁

わけもないしよの目づまを忍びあがるはしこのだんまつま」(十一ウ)

○●●●●●●●山地剝

つれてのかんせみやまのおくにふたり寝すをたのしみに」(十二オ)

- 地雷復
 これや目出度四海のなみにうかむ瀬もある世のためし(十二ウ)
 ●●●○○●天雷无妄
 ぬしの心を遠からしれればむりな願ひはせぬものを(十三オ)
 ●○○●●●山天大雷
 釣に夜も日も明石のうらの汐のみち干は幾とても(十三ウ)
 ●○○○○●山雷頤
 ぬしとわたしはついでふたごゝろおなじやうぢやがつりやはぬ(十四オ)
 四オ)
 ●●●●●○沢風大過
 小野小町の行末しれば人にたよらぬものはない(十四ウ)
 ●○○○○●○坎為水
 うそもまことに駿河の不二もゆきの肌えにやとけやすい(十五オ)
 ●●●●●○●離為火
 春の日和はわたしの心秋のひよりはぬしの癖(十五ウ)
 ●○○●○○○沢山咸
 信と忠とに身はおきふしのなんのおそれる物がある(十六オ)
 ●○○●●●○雷風恒
 いもせ雷神そのよいい中も人にやおちめの有ぞいの(十六ウ)
 ●●●●○○○天山遯
 人は一心たゞひとすぢによいもわるいもなる御山(十七オ)
 ●○○●●●●雷天大壮
 かくす事とは元より承知しれりやたがひの身のつもり(十七ウ)
 ●●●○○○●火地晋
 我はゆたかとゆだんはならぬ花にあらしのあるならひ(十八オ)
 ●○○●●●●地火明夷

- はじめはよけれどをはりがわるい中のわるいは常の事(十八ウ)
 ●●●○○●●風火家人
 君とわたしは比翼の鳥(ママ)苦勞しながらはなれない(十九オ)
 ●○○○○●●火沢睽
 酒にいはずする心のたけをうけてとほすはなさげなや(十九ウ)
 ●●●○○●○水山蹇
 かなはぬ恋なら先すてゝおけ叶やかかひに身をくやむ(二十オ)
 ●○○●○○●○雷水解
 晴雲に明るくなりふりまでも替りやすき(ママ)恋のみち(二十ウ)
 ●○○○○●●山沢損
 悪のむくひはたちまぢくると知てしらない地蔵顔(二十一オ)
 ●●●○○●●風雷益
 始手はこはいは思ひの外にやがて無運となるしらせ(二十一ウ)
 ●●●○○○○沢天夬
 時とじせつと世のことはぎに雨となる日も風となる(二十二オ)
 ●○○●○○○天風姤
 縁につながら系にしの尾繩きれどおまへのむりばかり(二十二ウ)
 ●●●○○○○沢地萃
 めくりあふ世もまたあらうかと仏だのみの身のつとめ(二十三オ)
 ●○○●●●●地風升
 出船入船そのある中にわたしやまよいて真帆片帆(二十三ウ)
 ●●●○○○○沢水困
 人の富のをうらやむよりも己が貧せぬやうにして(二十四オ)
 ●○○●●●●水風井

- 沢火草
- たとえ世間で笑をとまよ神がむすびしゑんぢやもの」(廿五才)
- 火風鼎
- 家やゆかしきあの琴の音と人にはるゝしどけなき」(廿五ウ)
- 震為留
- 手水鉢にて手を清水にちらす清玄桜ひめ」(廿六才)
- 艮為山
- 貧苦／＼におひまはされて末にやこの身のおきどころ」(廿六ウ)
- 風山漸
- 硯引よせかく玉ふみはやがておのれのほくとなる」(廿七才)
- 雷沢婦妹
- 主をわたしは木立にとりて化さるゝとも気にかげぬ」(廿七ウ)
- 雷火壘
- 人の恵のかずかさなりて神のめぐみもやがてまた」(廿八才)
- 火山旅
- 心がらとて身を喰つめてたよりなき身の醜どころ」(廿八ウ)
- 巽為風
- 鳥の離さえなく音をまねる親はこひしき雉子のこゑ」(廿九才)
- 兌為沢
- 仏迷へばぼんぶのやうとたとへ世間で言はいへ」(廿九ウ)
- 風水渙
- 常にゆだんのない人ならば何に驚くことがある」(三十才)
- 水沢節
- 野辺に飛かふ螢ぢやないが心がらゆえ身をこがす」(三十ウ)
- 風沢中孚
- これかあれかと迷ふて居てはいつも定まることはない」(三十一才)

- 雷山小過
 - 悪き心をさらりとやめておにも仏となるならい」(三十一ウ)
 - 水火既濟
 - 雪の降のはそりや幾日でもはれりやとけるが世のならい」(三十二才)
 - 火水未済
 - 憐る心にまことをこめてやがて夫婦と成田山」(三十二ウ)
- C 易占系統
- II 白丸黒丸図のあるもの
- 2 辻占文句のあるもの
- 『心いき辻うちをいづ』(菊池真一蔵。刊年不明。明治期か。)
- 心いき辻うちをいづ
- 此うらなひの見ようはせに六文手のうちにてよくふり思ふことを心にねんじて右のせにをなげべしせにのたをしろとしうらをくろとしほんもの○●●●●引台見給ふべしうたのものんくにより思ふお人の心の中かゞみにてらしみるがごとし」(一才)
- 伏義さんと云おかた八卦を作しといへどもあんまりきまじでようきならず思ふお人の心のうちをしるには心いきのどゞいつにしかず世の中のあだぎみたち一寸やつておみなんしと云 ？作
- うれしいなかだよ
- あけてうれしやあのはつがらすぬしの日のでをまつかさり
- ねがいがいつかなうだろ
- すへのやくそくかくまきがみのつきめはなれてものあんじ

●●●●●のちのたのしみをまつ
しんぼしなんせゆきまのわかなやがてよめなとなるわいな
●●●●●うはきらしいことばかり
みすてさんすなわしやつたもみちからむたよりはぬしばかり(二
ウ)

●●●●●まゝにならぬよ
むかうかゞみにやつれたすがたたれゆへこんなにくろうする
●●●●●一どはそどうのもと
おやけうだいにもみかへたひとをとられて此みがたつものか
●●●●●かんしんしてみな
じつをつくすもふじつになるもみんなおまへのむねひとつ
●●●●●心はわかりきつていよ
のちにやこうさとびやうぶをみせておびとおびとのこもちすじ
●●●●●なめてゞもしまいたい
しごとおぼへてぬいはりしやうとにやうほきどりのした(二
二オ)

●●●●●とかくわこうがよし
したしいなかにもれいぎがだいじもとはたにんのごとじやもの
●●●●●せけんのぎりもなんの其
いろのこいのとみなくちくちにいふはやくのかそねむのか
●●●●●どうせつまらぬ
さきであきかぜふかせるきならすべく此みもちるやなき
●●●●●うちあけて云のがよし
たがいにとりみなにはゞかろうはれてめうとになるがよい
●●●●●あんしん／＼
おもうとをりにねがいもかないじつにうれしいみのくはほう(二

ウ)
●●●●●どうしてこんなきになつたろう
とかくこいちにはあとさきみすのふりやうけんほどじつもある
●●●●●ゆだんはならぬ
よにつれてかはる心はとうじのならいよもやと思へどぬしまでも
●●●●●かんしんなこと
としよりすぎるとわらはゞわらいわたしやだいじなうちのひと
●●●●●うはきなようでも
いきなすがたにきをもみちばのいつかうきなもたつた川
●●●●●きがもめますよ
なかゞよいとてゆだんはならぬどんなあくまがあることか(二三オ)

●●●●●あきらめておしまい
したゑだのはなはおらずに扱ものずきなとゞかぬこすへでくろうす
る

●●●●●すへがおもはれるよ
うそとしりつゝあのかちくるまひくにひかれぬいろのみち
●●●●●うつかりはできず
さけはめどもつゝしみふかくどこまでつうだかわからない
●●●●●ばか／＼しい
ふられたそのうへまたてらされるきつねのよめりじやあるまいし
●●●●●むかしばなしになるよ
いまゞでいろ／＼きがねもしたがこれからはれてのわしがつま
(二三ウ)

●●●●●こうかい先にたゞす
いやなしんぼうするきならばごんなくろうをしはせまい
●●●●●おもしろい世のなか

金利のあがりでこいきなくらし日々ふたりでさいこのみ
○●●●●● おあいだ／＼

いやと思へばかたときどころこへをきくさへしやくのたね
○●●●●● やくのはつねのこと

男づくじやのつき合じやのとうはきよさんしてすむかへな
○●●●●● にくくもなし

じつがこうじてついでだぐちよきにかけしやんすないまのこと
(四才)

○●●●●● どうなるものぞ
おまへもやばならうきめもみまいすいがみをくうむふんべつ

○●●●●● のちがだいじ
すへをかんがい此みをおもひいやなわかれもせにやならぬ

○●●●●● おもしろし／＼
いろのせかいをさらりとすてゝこれから二人りでともかせぎ

○●●●●● いけないねい
ねとるたくみのむねわるおんな人のなげきもしらぬぶり

○●●●●● こやつかいだ
うるさすぎるなあいそがつきるりんぎぶかいもほどにしな(四ウ)

○●●●●● このうへなし
日ましにはんじやういへとみさかへ上下そろつてむつましく

○●●●●● ぢれたたいよ
そんなにくけりや口かづいわずいつそころすがよいわいな

○●●●●● ちがいなし
いへのはんじやうよしあしともにおまへひとりのむねにある
○●●●●● こツちの心しだい
かどのいぬにもようあるたとへあいそづかしをせぬがよい

○●●●●● 云にはれぬじやう有
さきはしうもちたよりもならずいつてみたいにやかこのとり(五
才)

○●●●●● ころうをしたよ
なかに口きかれてうたがはれたもとけてうれしきおびとおび

○●●●●● とうざばかり
たぬきねいりをきつねがおこしおきてばかそかばかさりよか

○●●●●● 上しゆび／＼
ねがをにみとれてまくらにもたれどこへこんなほれたろう

○●●●●● らくはくのたね
じやうになるとわがまゝよしなみつればかけるがよのならい

○●●●●● いくじはなし
はなげのばしてつぎこむかねをまぶへとられるばかもある(五ウ)

○●●●●● ころうありすへよし
なんの其岩にたつ矢もあるよの中にいのりてとぐかぬことはない

○●●●●● 先へいふてよし
おやはにしきをきるみといふがてなべさげたいこともある

○●●●●● 人をたのむべし
ゆめになりともあはせておくれゆめじやうきなまたちやせまい

○●●●●● あつさがよし
くめどつきせすくまねどまさず井戸の水しやううはきしやう

○●●●●● せけんがだいじ
なまじたがいにあらためだてをするゆへおしくくめにもたつ(六
才)

○●●●●● なんにもならず
すいたおかたとかきのめされておえずにひとりでこのばん

●●●●●●●● すへはよし
 かんしやくもちでもこちらのしやう馬のたづなにふねのかじ
 ○●●●●●●● くぜつあり
 かたいきしやうがしやうこじやなど、よいにいふたはきやすめか
 ○●●●●●●● こたいられず
 ないしよはできてもせけんがあればなだちよたのんでそうがよい
 ●●●●●●●● しんぼうがかんじん
 おやはふせうちわしにはすいたいきなおまへはなまけもの「(六ウ)
 ●●●●●●●● みにあまるくろうあり
 いぢとはりならまけないわたしかねにせかるゝそのつらさ
 ○●●●●●●● ことをまかせてよし
 しらぬたびぢにくろうをしてもせけんに入おにやないものよ
 ○●●●●●●● すへよし
 ふみのたよりもはれてはならずうはさするのむねのうち
 ●●●●●●●● 大によし
 くれたけのよくをはなれてみさをゝまもりほかのこののはだしら
 ず
 ○●●●●●●● なにごともよし
 ぬしをたいせつふたおやさんへこころをつくすはわしのやく「(七オ)
 ●●●●●●●● くるうありつゝしむべし
 うれしがらせてまたおこらせてわざはいまねくもくちがもと
 ○●●●●●●● はなるゝ
 きりこどうろでうはべのかざりはらもみもないこゝろさし
 ●●●●●●●● 人をたのみてよし
 こみいつたあやがあつてはちよいとはとけぬさゝいなじやまならな
 んのその

●●●●●●●● 万事あし、
 ようたしやつつらつく／＼みればはくそよだれにすじだらけ
 ○●●●●●●● すへほどよし
 二人りがゑにしはいろふか川よ「(二上り) かいのはしらにかきの
 やねあだなあさりにそうよりも」やつぱりおまへのばかゝよい「
 (七オ)

C 易占系統

II 白丸黒丸図のあるもの

3 判断文のあるもの

『恋の辻占独り判断』(菊池真一藏。刊年不明。明治初期か。判断文
 省略。)

「恋の辻占」都々一独うらなひ「(表紙)

恋の辻占独り判断

このつぢうらの仕方はせに六文を手に握りなむ乾元かうり／＼／＼
 と三べん唱へその銭を投出しその銭の並びしとをりを引合せ歌の心
 と判断とを見てその吉凶を知るべし

○●●●●●●● 白は波の形なり

●●●●●●●● 黒は文字の方なり

●●●●●●●● 乾為天(判断文省略)

まほに受よく乗出す船もふとした風からあと戻り「(見返し)

○●●●●●●● 坤為地

若や夫かと閨の戸明りや月はおぼろに啼水鶏

○●●●●●●● 水雷屯

花に靡くも世渡り故にこちは三筋の糸やなぎ

●○○●○山水漿

ちから揃へば踏石さへも揚てゆるがす霜柱「(二才)

●○○●○水天霽

顔は見ゆれど互ひの胸を明て言れぬガラス窓

●○○●○天水訟

苦勞氣がねを積重ねたる二等煉瓦の樂住居

●○○●○地水師

ひよく連理と契りし中も仇な嵐しで氣がそれる「(二ウ)

●○○●○水地此

心の苦勞もしばしの間昔語りの種となる

●○○●○風天小畜

月の誠はうつらぬ筈よ池にや浮氣な草がある

●○○●○天沢履

新聞へ出された時には恨んだものゝ斯成りや二人の結ぶ神「(二才)

●○○●○地天象

赤いしかけて迷はずものは恋の手管の教道師

●○○●○天地舌

アレサおよしと払つた手先いつか枕の下になる

●○○●○天火同人

酒も豆腐も自由な郎で聞は果報かほとゝぎす「(二ウ)

●○○●○火天大有

右と左りに妾と女房酒と肴で樂遊び

●○○●○地山跋

うひもつらひも恋路の習ひ辛抱仕とげて宿の妻

●○○●○雷地予

花よ涼と樂しむ内にいつか吹こむ秋のかぜ「(三才)

●○○●○沢雷隨

心と心があいさへすれば性が合ふが合ふまいが

●○○●○山風疊

かたいお前と思ひの外にみかけ計りの夏氷

●○○●○地沢臨

月夜がらすと止ては見たが嘘のつけない鐘のかづ「(三ウ)

●○○●○風地觀

床の花よと詠むるうちにいつか色づく室の梅

●○○●○火雷噬嗑

暮る噂さも訳さへつけば晴てうれしい梅雨の空

●○○●○山火賁

主の此頃顔向せぬは胸に焚火でけむいのか「(四才)

●○○●○山地剝

おぼろ月夜がさらりと晴て忍ぶ恋路の邪魔をする

●○○●○地雷復

思ふお方は兵士にあたりわづか三とせが百千年

●○○●○天雷无妄

端書便りじや人目が多い中を知らせぬ封じ文「(四ウ)

●○○●○山天大畜

花に來りてたはむれる蝶も居所さだめぬ花このみ

●○○●○山雷頤

添れにや死ぬとは開けぬことよ命ありやこそ末もある

●○○●○沢風大過

同じ人でもお客と車夫は車へ乗す人曳す人「(五才)

○●○○●坎為水
 すかぬお客に見受をされて樂も苦の種主のたね
 ○●○○●離為火
 風のまに／＼アノ浮草は岸を定めず花がさく
 ○●○○●沢山成
 枕あいてに写真をながめ主とそひ寝をしたころ(五ウ)
 ○●○○●雷風恒
 ぬいたりほめたりして居るうちに足をいためる出来のくつ
 ○●○○●天山遯
 灯火の蔭に迷ふてうか／＼来るか命するぞ夏の虫
 ○●○○●雷天大壮
 まだか／＼と夢中に成て欲に手を焼く米会社(六ウ)
 ○●○○●火地晋
 心うち解下紐までもとけてかたらふ好た同士
 ○●○○●地火明夷
 うそじやないよとことわる丈に猶もうたぐる胸のうち
 ○●○○●風火家人
 ヒタと寄そひ抜身を握り殺しておくれと鼻でいき(六ウ)
 ○●○○●火沢睽
 口の車へ野稔をば乗てそして三すじの糸でひく
 ○●○○●水山蹇
 延した心の糸目が切て風にたゞよふ奴だこ
 ○●○○●雷水解
 主の咄しは表もうらもなくて涼い門やなぎ(七ウ)
 ○●○○●山沢損

たゞきながらも疑はしやんす赤い西瓜の氣もしれず
 ○●○○●風雷益
 塵積で山と成程借銭したも三味の調子にのつたばち
 ○●○○●沢天夬
 以後の浮氣は罰金ときめて是までしたのはおとり消(七ウ)
 ○●○○●天風姤
 桃と桜をならべて見ればいつれおとらぬ花の色
 ○●○○●沢地萃
 待夜の長さを四時間つめて逢夜の短いたしまいに
 ○●○○●地風升
 智恵は付もの勉強次第鳥や毛物が芸をする(八ウ)
 ○●○○●沢水困
 ちから自慢は役には立ぬ色の初わけは義理情
 ○●○○●水風井
 私しや長靴おまへはとんび暗て逢れぬ身の因果
 ○●○○●沢火革
 錠兜は昔しの武者よ今じやシャボにつゝっぽう(八ウ)
 ○●○○●火風鼎
 白と黒とはわたしの胸に置ておまへにゆづる勝
 ○●○○●震為雷
 色をしたふて小蝶の客が通ひくるわの夜の花
 ○●○○●艮為山
 したふお人は深山のさくらたどる路さへないつらさ(九ウ)
 ○●○○●風山漸
 おまへに見せよと結つたる髪を夜中に乱すもおまへ

○●●●●雷沢婦妹

末の遂ない縁ならよしな苦勞する身の甲斐がない

○●●●●雷火豎

岸の柳はそよ風に靡くふりして迷て居る」(九ウ)

●●●●●火山旅

入替引替客のせるのも浮た私しの舟だから

●●●●●巽為風

斯なりや互ひの手ごとに行ぬ入れざなるまい人のくち

○●●●●兌為沢

意気なさんぎり小意気な坊主一つべつついニタごころ」(十オ)

●●●●●風水換

あきらめませうぞ最お互ひに色増や紅葉も散ばかり

○●●●●水沢節

わたしが思ひは西洋床よ結ぶに言れぬ神いちり

●●●●●風沢中孚

斯なりや別れが又惜くなる解たはなしの雪の朝」(十ウ)

○●●●●雷山小過

へチャナげいしやも官員さんもおなじ勤の身の苦勞

○●●●●水火既濟

?たエレキが感通なしうれしいごげんが苦のはじめ

●●●●●水火未濟

お前いやでもほうばいのてまへわたしや感地でも呼とうす」(裏見返し)

C 易占系統

II 白丸黒丸図のあるもの

3 判断文のあるもの

『錢判断八卦好此』(菊池真一藏。皓月堂与介発行。明治二十五年)

錢判断八卦よしこの

皓月」(表紙)

錢判断八卦好此」(見返し)

八卦よし此序

大和歌は猛き心をば和らげ鬼神を感ぜしむ男女の中をまやわらくるは歌なり草庵題林の振り玉とおもしろく屁玉のやうな御放屁いたたきしもこゝに此よしこの妙なるは師伝もなく秘説もなし百事に通づる八卦六十四卦に随ひ換ふれば其愛玩を願ふ而已

明治二十五年 辰の新ばん

融和齋暢堂」(二オ)

占見出し

(一)〜(三十三。白丸黒丸図は省略)」(二ウ)

(三十四)〜(六十四。白丸黒丸図は省略)

愚

白は一錢

黒は龍形」(三オ)

座聴松風音」(三ウ)

一●●●●●乾为天

(判断文省略)

胸の蒸気のつひ燃すぎていつも航海する苦勞」(四オ)

二○○○○○坤為地

あれざお待よ硝子で透(みへ)る只さへ人目の多い口」(四ウ)

三●●○○○水雷屯

五十二●○○●○○●良為山

規則で鳴のかアノ明がらすたまにや日曜(どんたく)するがよい
(二十九ウ)

五十三●○○●○○●風山漸

主の心と夏充る水解るととけぬで苦勞する。(三十才)

五十四●○○●○○●雷沢姉妹

風船にフツト乗られこちや登りつめ先は浮気な空だのみ(三十ウ)

五十五●○○●○○●雷火豊

若や夫かと門の戸明て見れば逃出す探訪者(三十一才)

五十六●○○●○○●火山旅

猫や狐がうき世になけりやこんにや苦勞をするものか(三十一ウ)

五十七●○○●○○●巽為風

斯なりや互ひの手ごとに行ぬ入さなるまへ人のくち(三十二才)

五十八●○○●○○●兎為沢

主が来たかと愁の戸明りや憎やからすの阿房なき(三十二ウ)

五十九●○○●○○●風水渾

嘘も誠も仕方で知れる隠すおまへの気が知れぬ(三十三才)

六十●○○●○○●水沢節

世帯かためてヤレうれしやと思やおまへのまた浮気(三十三ウ)

六十一●○○●○○●風沢中宇

三味線の撥を小楯に欠伸を隠し強(むり)にこぼしたそら涙(三十四才)

六十二●○○●○○●雷山小過

惚たお方は皆筒袖ですがる袂のないつらさ(三十四ウ)

六十三●○○●○○●水火既濟

心とこゝろがあひさへすれば性があはふが合まいが(三十五才)

六十四●○○●○○●水火未済

ぬしは原告私は被告まはす屏風の判事やく(三十五ウ)
明治廿五年四月八日印刷

同 年四月十日出版

愛知県尾張国名古屋市江川町百九十八番戸

編輯兼印刷発行者 佐藤富

発行所 名古屋市江川町四丁目

皓月堂与介

発売所 名古屋市門前町三丁目

佳月堂安吉

同 市本町二丁目

新月堂逸三郎(裏見返し)

六 終わりに

都々逸そのものの研究、易占と都々逸との関係など、調査しなければならぬことは多々あるが、別の機会に譲りたい。

(注一) 青木元氏の御研究には、次のようなものがある。

『辻占』(平成九年。辻占研究社発行。)

『辻占』(平成十年版) (平成十年。辻占研究社発行。)

『辻占』(平成十一年版) (平成十一年。辻占研究社発行。)

『辻占』(平成十二年版) (平成十二年。辻占研究社発行。)

- 『辻占 平成13年版』(平成十三年。辻占研究社発行。)
- 『明治期の辻占』(平成十三年。辻占研究社発行。)
- 『辻占統本 その1』(平成十五年)
- 『辻占統本 その2』(平成十六年)
- 『辻占薬子が誕生するまで』(二)占い・厄除け・開運薬子「展」
- 第64回虎屋文庫資料展。平成十六年。虎屋発行)